

41585

教科書文庫

4
810
41-1922
20000 54273

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

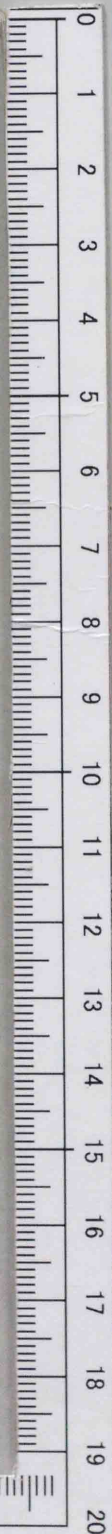
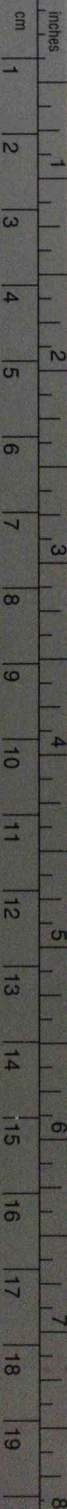


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



3759  
Ha7  
資料室

訂三  
帝國讀本  
卷三



資料室 375.9

Ha7

日三十二月一年一十正天

濟定檢省部文

文學博士芳賀矢一編

# 訂三帝國讀本

東京

合資會社 富山房發行



## 訂三帝國讀本 卷三目次

一	神代其の一	一
二	神代其の二	七
三	大日本國	三
四	畝傍山	一四
五	勿來關	二八
六	潮の岬	三二
七	無線電信を待ちつゝ	三六
八	渡鳥の生活	四一
九	詩的農園	四四

目次

一〇	初夏の感	四六
一一	青蘆の影	四九
一二	桶狭間の戦 其の一	五一
一三	桶狭間の戦 其の二	五七
一四	武士道	六五
一五	英佛獨の國民性	七三
一六	山 寺	七六
一七	山の聲	八五
一八	西哲の訓言	八六
一九	蟻と蟬	八八
二〇	夕立雲	九二
二一	海洋の月明	九七

二二	我が南洋	一〇一
二三	珊瑚礁	一〇九
二四	信天翁を釣る	一一四
二五	曾呂利新左衛門	一一〇
二六	風と露	一一五
二七	富士の大觀	一二〇
二八	人の親	一二〇
二九	少ピット	一二二
三〇	人の香氣	一二九
三一	學徒に示す	一三三
三二	鍵の國と障子の國	一三七
三三	談義僧	一三三

三四 榊原康政……………一六七

自修文

- 一 時間……………一
- 二 生存競争……………四
- 三 リンカーンの少年時代……………七
- 四 夏季休暇……………一三
- 五 僕の故郷……………一五
- 六 世界の旅行……………一八
- 七 歐洲の初航海……………二三
- 八 比叡山の眺望……………二五

卷三目次終

三訂帝國讀本卷三

一 神代其の一 *美文(散文)*

人類に歴史ありてより幾千年、我が國史の神代に始れるは、たまく、以て、我が國の世界の舊邦たるを證明する所以なり。

天地開闢の初、高天原に生れ出て給へる神は、天御中主神、次に高御產靈神、次に神皇產靈神、此の三神は萬物造化の神なり。次に國土未だ成らずして浮脂の

造化

諸冊ノ様

如く漂へる中に、葦の芽の萌出づるに似たるものあり。之により生れ給へる神は、可美葦芽彦舅神、天常立神、次に浮脂の如き物より生れ給へる神は、國常立神、豊斟淳神、以上の七神は獨神にして、御身を隠し給へりといへり。次に男女の神相次ぎて生れ給ふこと五代、五代目の男神を伊弉諾神、女神を伊弉册神と申す。諸の天神、此の二神に詔して、此の浮び漂へる國を固め成せ。と宣ふ。二神乃ち天瓊矛を持ちて、天の浮橋の上に立ち、瓊矛をさし下して探り給ふに、矛の先より滴る潮凝りて島と成れり。これ礫馭盧島なり。二神こゝに於て其の島に降り、八尋殿を建て、住み給ひ、

始業  
 〇子神三  
 〇業

大八洲國  
 測候所

それより國土及び神々を生成し給ふ。まづ淡路島、次に四國の島、次に隱岐の島、次に筑紫の島、次に壹岐の島、次に對馬の島、次に佐渡の島、次に大倭、豊秋津島、即ち本州なり。まづ此の八島を生成し給へれば、日本國の古名を大八洲國と稱ふ。其の他尙小さき島々を生成し給へり。かく國土を生成し終へて後、風の神、海の神、山の神、木の神、野の神等を次々に生成し給ふ。大八洲及び山川草木已に成りたれば、此の度は天下の主たるものを生成せんとて、日の神を生成し給ふ。御名は大日靈貴、又天照大神と申す。次には月の神、御名は月夜見、次には素戔嗚神なり。二神かくて、天照

〇名〇〇  
 〇〇〇  
 〇〇〇

神代其の一

三

神去る

さすらふ

大神には高天原を治めよ、月夜見神には夜の國を治めよ、素戔嗚神には海の國を治めよと教へ給ひぬ。伊弉册神最後に火の神を生成し給ひて神去りましぬ。伊弉諾神はこれを歎きて、女神のいます黄泉國まで到り給ひしが、やがて歸り來て、汚き國に行きたれば、禊して穢を清めんと宣ひて、筑紫の橘の小門の檍原に於て、御身を洗ひ清め給ふ。此の時、御衣、御帶、御珠等解棄て給へる物よりして成出で給へる神々を始め、數多の神々自ら成出で給ふ。さる程に、素戔嗚神性勇悍にして、粗暴のふるまひ多かりしかば、父の神の怒に觸れて、遠き國へさすら

禊

汚き心  
たばさむ

ひ給はんとす。よりて一度姉大神に暇乞せんものと、高天原さして上り給ふに、山川國土悉く震動す。大神驚き給ひて、弟の神汚き心ありて我が國を奪ふならんと宣ひて、弓矢をたばさみて待ち給ふ。素戔嗚神上り來て、邪心無き由を申し給ひ、二神相盟ひて、大神は素戔嗚神の佩び給へる十握劍を取り給ひ、素戔嗚神は大神の持ち給へる御統玉を乞受け給ひて、いづれも天の眞名井の水にふりすぎ、嚼碎きて吹き給ふ。其の霧の中より多くの神々成出で給へり。御劍の霧の中よりは女神三柱、御珠の霧よりは男神五柱なり。此の男神の第一を天忍穗耳神と申す。大神喜びて、

あはなち  
みぞうめ  
しんまね

「こは我が物より生れ出でたれば我が子なり」と宣ふ。かくて大神の御心は和ぎたれど、素戔嗚神の荒びたる行は尙やまず、大神の御田に畔放ち、溝埋め、重播などさまぐの悪事を爲して農業を妨げ給ひ、或時は、新嘗の御殿に糞まり散らし、又齋機殿に生きたる馬を逆剝にして、投入れ給へり。恩愛慈仁の徳に富ませ給へる大神も、今こそ其の亂行に堪へかねさせ給ひて、天岩戸にこもり給ひしなれ。是に於て八百萬神神議りに議り給ひて、再び大神を岩屋より出し奉り、素戔嗚神は此の罪によりて、出雲に追はれ給ひぬ。

二 神 代 其の二

(一)仁多郡船通山  
に發し、  
湖に入る。峯道

素戔嗚尊は出雲の簸の川上に至りて、足摩乳、手摩乳といふ老夫婦に逢ひ給ひ、其の請によりて、八岐の大蛇を退治し給ふ。さて老夫婦が八人の娘の中、唯一人残れる櫛稻田姫を妃として、須賀といふ處に宮造りして住み給ひ、御子、御孫、次第に榮えたり。其の六代目の御孫を大國主神といふ。大己貴神、八千矛神などいふ別名もあり、稻葉の白兔を助け給ひし神なり。幼き時は、種々の困難に逢ひ給ひしが、御行正しく、御徳高かりしかば、心悪しき兄神達も次第に服し奉りて、よく出雲地方を治め給へり。其の後少彦

國土の經營

名神と心を合せて、尙國土の經營に努め給ひ、醫藥の道をさへ教へ給へり。

豊葦原の瑞穂國

高天原なる天照大神は、豊葦原の瑞穂の國は、我が子孫の君たるべき國なり。」と宣ひて、御子天忍穗耳神を下し給はんとす。されども國中未だ神命に従はざる者多かりければ、まづ天の穂日神をして、大國主神に其の旨を傳へしめ給ふ。穂日神三年まで復命せず、よりて更に天稚彦を遣はし給ひしが、これはた八年に至るまで復命せざりき。是に於て武甕槌神を遣はして下らしめ給ふ。大國主神、長子事代主神と謀りて、「畏し。此の國は御子に奉らん。」と答ふ。次子の建御名方

至權公私

復命  
はた

神は服する色無く、信濃國諏訪に逃げのびしが、そこにて遂に屈服せり。

此の時天忍穗耳神の御子に、瓊々杵神生れ給ひしかば、父神に代りて下り給ふ事となり、多くの文臣武將を隨へて、此の國に降臨し給ふ。此の時天照大神は詔して、「爾皇孫行きて治めよ。寶祚の榮は天壤と窮無かるべし。」と宣ひ、又八咫鏡と、叢雲劔と、八坂瓊曲玉とを授け給ひて、「此の鏡を見ること、我を見るが如くせよ。」と仰せ給ひき。これ歴代傳へ給へる三種の神器にして、萬世一系の皇統は、こゝに其の基を開けるなり。瓊々杵神は國神大山祇神の女木花開耶姬を娶り

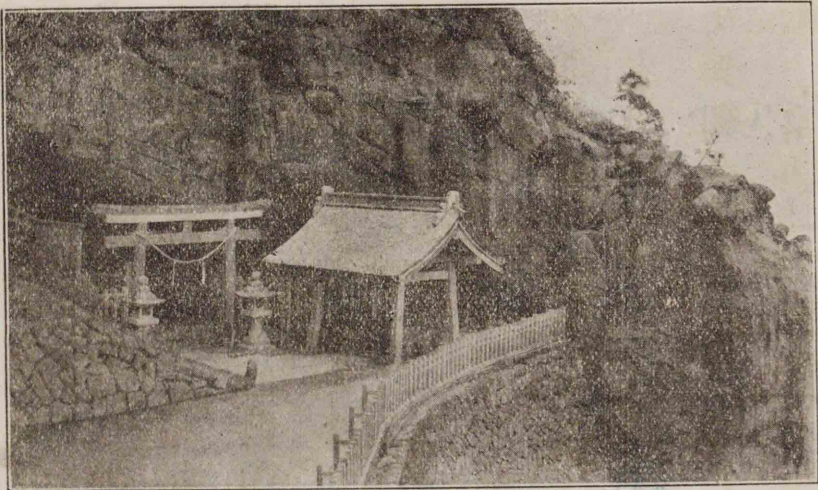
寶祚の榮は天壤と窮無かるべし  
此の鏡を見ること、我を見るが如くせよ



傳唱  
明確を失ふ  
信念  
歴史眼

給ひて、火闌降神、彦火々出見神等を産み給ふ。彦火々出見神は海神の宮に行き給ひし神なり。海神の女豊玉姫を娶り給ひて、其の皇子に鷓鴣草茸不合神あり。鷓鴣草茸不合神の御子は、即ち神武天皇なり。天孫降臨より四代まで日向に都し給ひしが、神武天皇御年四十五にして東征の途に上り給ひ、大和地方の賊を平げて、始めて橿原に即位の式を挙げ給ふ。之を我が國の紀元第一年とす。

特色  
殘虐暴戾



(村戸鷓鴣向日) 社神戸鷓鴣るれ祀を神合不茸草鷓鴣

事實を知らん事は難し。但し之を他人種の開闢史に比して、我が國土が皇祖諸神と同じく、伊弉諾、伊弉册二神の御子たることは、國土と皇室と相離れざる信念を示すものとして、我が神代史の一特色といふべし。他人種の神話には、往々殘虐暴戾の神多きに、我が神々の温和慈仁の徳に富

君臣の分  
上下の誼

國體の淵源

ませ給へるを見ても、我が國民性の一端を知るべし。總じて平和の神話にして、君臣の分早くより定まり、上下の誼親子に等しき所以も、之によりて窺ふべく、祖先を尊奉して、萬世動かざる國體の淵源も、之によりて知るを得べきなり。

天地の神やかためし萬世に（註）

たて、動かぬ國の御柱 平（註）春海

（一）江戸時代の國學者村田春海、春道の子。賀茂真淵の門人。文化八年（一八二一）四月七（一）日、年六十六。

必をた懐新

三 大日本國（註） 産ませし國に、（註） 御祖の神の 孫降りて 君とし知らず。

寶祚は天地と 窮あらず。

此の國、此の君、世に類なし。

大君、民を 子の如おぼし、

國民、君をば 親とし慕ふ。

さながら一家の（註） 睦は（註）はに。

此の君、此の民、世に類なし。

大和の國の 鎮の山と、

富士の嶺み空に 神さび立てり。

貴き皇國の 姿を見せて

とはに

鎮の山

神さぶ

いかに宗(と)ノ  
歌(り)日(ひ)弘(ひろ)法(ほう)  
大師(だいし)ノ後(ご)

けだかく雄  
しき國ぶ  
り雄

(一)大和國高市郡  
白檀村。俗稱  
慈明寺山。  
旅衣

高きは此の山 世に類なし。

日出づる國の しるしの花と

櫻は霞に まがひて咲けり。

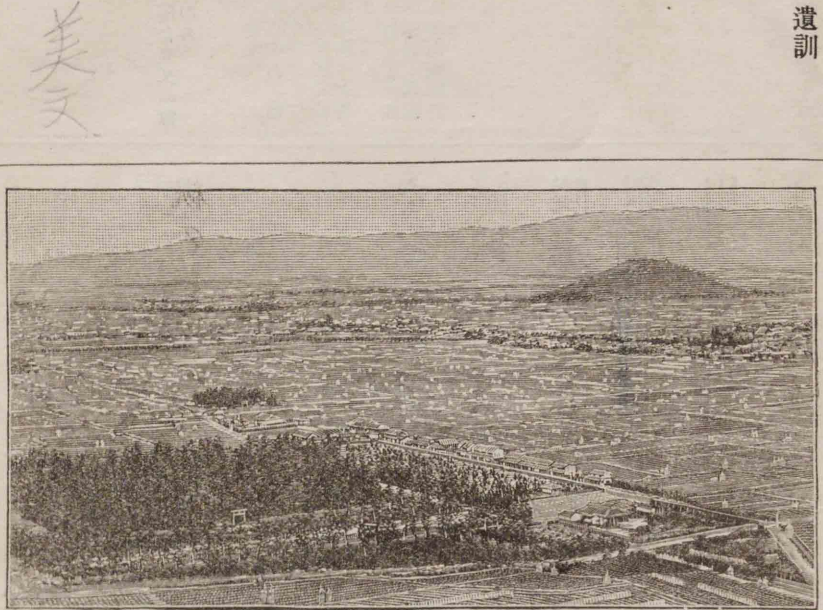
けだかく雄々しき 國ぶり見せて

匂ふは此の花 世に類なし。

四 畝傍山 落合直文

(一) 畝傍山の東北の地數町をトして、瑞籬いと貴く結  
ひめぐらしたるは、皇祖神武天皇の御陵なり。吾等旅  
衣の塵打拂ひて御前に額づく。おもふ昔、天皇、天祖の

遺訓



(山無耳はるゆ見に方右) 景全陵北東山傍畝

遺訓を奉じて、こゝに皇基を  
定め給ひしより、今に至るま  
で殆ど三千年。君臣の分明ら  
かに、父子の親厚く、この世界  
に類なき一大帝國を成し給  
へり。吾等この國に生れ、この  
君の御流を奉じて、この土に  
生育する者、この御陵を拜し  
て、いかでか限りなき感慨胸  
に溢れざらん。をろがみ終り  
て、友のよめる、

四 畝傍山

一五

<sup>(一)</sup>落合直文の家  
の名。

いにしへをしのぶ袂に通ひけり

畝傍の山の峯のまつかぜ

萩の家、しばし空うち眺めたりしが、

かしこくも額づく袖に散りにけり

畝傍の山の松のしたつゆ

などいひて、やうやうに御前を退く。

抑、中古以來、王室衰へさせ給ひてよりは、歴代の帝  
陵定かならざるもの多かりしのみか、この御陵さ  
へほとく、知られざる程にて、里人はこゝを「じんむ  
田」などと唱へ居たりとなん。さるを王政古に復りて  
より、今はかくめてたくしなさせ給ひしかば、なにの

隴を得て蜀  
を望む

思ふこともなけれども、なほ隴を得て蜀を望む人情  
よりいはんに、この畝傍山の全體を悉く取入れて、瑞  
籬廣く結ひめぐらさばいかに。さるは伊勢の神宮と  
相並びて、その神々しさも一入まさりぬべく思へば  
なり。

さて綏靖、安寧二天皇の御陵を拜みて、長谷の方へ  
と志す。耳無山、天香具山右左に見ゆ。古きことなど更  
に思ひ出でて語り合ふ。夕日西に傾きて風、漸う涼し。  
夜になりて、観音の前なる宿に着きぬ。

萩之家遺稿

<sup>(一)</sup>大和國磯城郡  
初瀬村。觀音  
を以て名高  
し。  
<sup>(二)</sup>耳成山とも書  
成村にあり。  
<sup>(三)</sup>同郡香久山村  
にあり。

21  
...

ゆなほめ

(一)清原氏、出羽の豪傑。寛治元年(一一七四)源義家(一七)に攻められ、捕られて殺さる。與黨(二)清原武衡の甥。寛治元年義家に殺さる。悦服(三)常陸、磐城の國境。

模糊 續紛

兵馬倥傯

襟懷

五 勿來關ノミヤ

熊田 葦城

武衡(一)既に縛に就き、家衡(二)誅に伏し、與黨亦斬に處せらる。義家出羽を治むること十年、國內靜平にして民心悦服す。乃ち留守を置きて京都に還らんとす。

春風長閑に渡りて、一路の芳草馬蹄輕し。客心悠々、亦戰時の秋に似ず。行きく(三)て勿來關に差掛る。山上模糊として白きは雲か、地上續紛として翻るは雪か、雲と見えしは梢の花、雪と思ひしは散來る櫻。關山春深き所、心無き身も感などか起らざらん。兵馬倥傯の間、に在りては、月を觀ても樂しからず、鳥を聽くも嬉しからじ。今や干戈既に戢りて、襟懷特に安し。將軍駒

逸興

一かへり二かへり口吟む

長亭短驛

門前市を成す

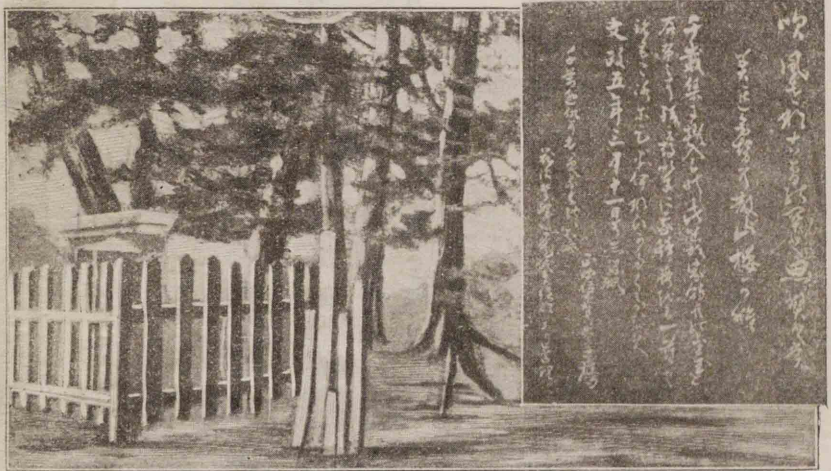
公家

を樹下に駐めて顧望すれば、胄も花、甲も花、身は何時しか畫中の人となる。逸興頓に湧きて、詩情自ら動く。吹く風をなこそその關と思へども  
みちもせに散る山ざくらかな(此ノ風流心也)  
一かへり二かへり口吟みつゝ、永き日の暮れなんとするをも知らず。

かくて長亭短驛、日數を重ねて京に着す。百戰功を重ねて一門光を添ふ。來りて賀を述ぶるもの、門前市を成す。武人は武を談じ、歌人は歌を談ず。一貴人義家に向ひて語る。陸奥は名所多き國と聞く。年久しく彼の地に在りつれば、皆それ(く)に見候ひなん。是のみ

五 勿來關

をこ



こそ羨ましき心地すれ。と。  
 義家畏りつゝ答ふ、心長閑  
 けく候はんには、ゆかしき  
 事も候べけれど、軍に暇無  
 き身には、優しき詠とても  
 候はず。唯勿來關と申す所  
 にて、花の散る様の餘りに  
 興深く、あはれ心あらん人  
 に見せまほしく覺え候ひ  
 しが、其の儘に打過ぎなん  
 も口惜しく、をこの口吟に

秀歌

任せてかくなん仕りぬる。とて、彼の吹く風の歌を打  
 誦すれば、實にも秀歌をこそ致しつれ。とて、感歎特に  
 淺からず。花は櫻木、人は武士。斯の人、斯の花を詠じて、  
 花と人と千古に香し。

義家畏りつゝ答ふ  
 日本史蹟

(一)紀伊國最南端の岬。

見る目遙か

磯馴松

六 潮の岬

杉村廣太郎

とかくして潮の岬の端へ出た。なだらかな高低の  
 ついた一面の芝生が、見る目遙かに打續いて、其の間  
 に薊、蒲公英が咲いてゐる。背の低い磯馴松がぼつり  
 ぼつりと處々に立つて居て、それに繋いだ牛の姿が  
 如何にも春めかしい。村の少女子が此の芝生で鬼事

山骨  
寄せては返  
し寄せては返  
す

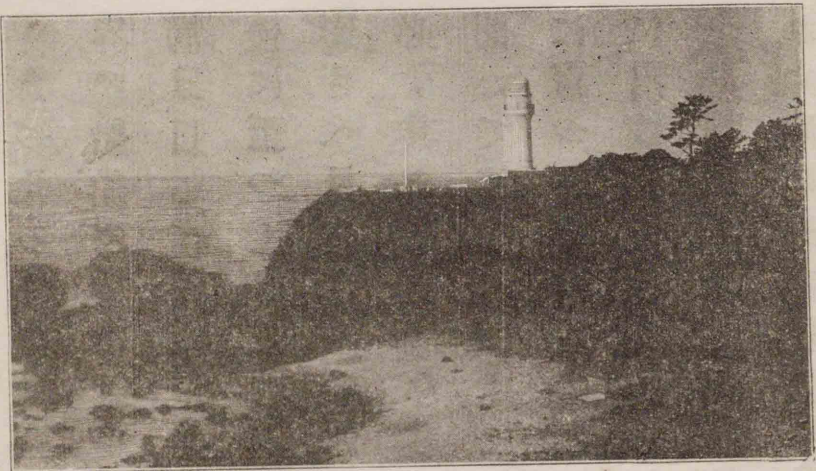
煙波縹渺

New Guinea.  
ニューギニア

でもするの、陽氣を笑聲が遠くから聞える。右の方には、燈臺の白い壁が巍然として中空に聳え、左には無線電信局と海軍の望樓とが、さながら崖から落ちかゝるやうな處に立つてゐる。崖の下はと見ると、幾千年の波に洗はれて、山骨あらはになつた巖が幾重となく並んで、之に太平洋の大波がどろどろと、寄せては返し、寄せては返してゐる。

僕等は今日日本の本土の最南端の一角に立つた。打開けた太平洋の海面、煙波縹渺として、其の果を何處としても覚えぬ。地圖を按ずるに、此處から正南は恰も蘭領印度のニューギニアを隔て、濠太利利の大陸

California.  
合衆國の  
州。Los  
Angeles.



潮の岬

に相對し、東は遙かに太平洋の千波萬波を越えて、北亞米利加はカリフォルニア州のローサンジェルスマで、間を遮る物も無い。日本の南端の一角といふと、如何にも世の中から棄てられた處のやうに聞えるが、其の實此の一角が即ち日本と世界との接觸する處である。

まづ此の岬角に立つてゐる白色不動の燈臺は、世界の船舶に其の針路を示してゐる。此處の無線電信局は、日々夜々に世界と相語つてゐる。更に海軍の望樓に至つては、夜と無く晝と無く、苟も此の下に船の影さへ見えたなら、内外何れの國の船たるを問はず、必ず其の名を問ひ、其の行先を尋ね、偕は其の用向を聞いて、傳ふべき處に傳へる。かう世界的に出來た處に育つた潮の岬の人々とて、其の中から濠洲や、米國に出稼する者の多く出て來たのも無理は無い。荒海を見馴れた眼には、對岸を隣國と心得てゐるかも知れぬ。潮の岬の民は、小さいながらも世界的の民だと

著

(一)明治四十二年四月。

(2) Kent. 英國東南端の州。

いたまし

色めく

思つて、ふと自分の事に氣がつくと、今日四月の廿二日。去年は愈、紐育の見物を終つて、明日大西洋に乗出さうとした日。一昨年はちやうど今頃、巴里から倫敦へ向ふ途中、海峡を過ぎてケント州の櫻桃、杏、梨今を盛と咲亂れた中を走つてゐた頃である。

折しも望樓でしきりに信號旗が揚る。それと急ぎ見に行けば、望樓長は芝生に立てた望遠鏡の下に坐つて、信號旗を上げよ下げよと忙しげに指揮してゐる。隣の無線電信局では、ぱちくぱちくとけたましい音を立て、電信をかけてゐる。今まで靜まり返つてゐた此の日本の最南端の一角は、俄に色めき立つて見



えた。

沖には通報艦の淀が行く。

—へちまのかは—

七 無線電信を待ちつゝ 島村速雄

世界の無線電信御稿本御送附にあづかり候處、時節柄にもあり、且は出版御急ぎの事と相察し、ゆるゆる拜讀の餘暇を得ざるは遺憾の至に候へども、其處此處と拾讀致候のみにて、尠からざる興味を覚え申候。

電信の戦争に至大なる影響を及し候事は、疾く人の知る所にこれあり、<sup>(一)</sup>今回の戦役に於ても、大山元帥

<sup>(一)</sup>時あたかも日本海海戦の前

<sup>(二)</sup>日露戦役。

情報

が南滿洲方面に蜘蛛の網の如く張られたる電信電話線を通して、日夕諸方面よりの情報を得られ、數十萬の大軍を指揮して、古今未曾有の大勝利を収め居られ候事は、何人も想像し得る事と存候へども、東郷大將が海上に於て目に睹ること能はざる電波を驅つて、數十隻の艦を手足の如くに指揮し居られ候事は、聊か世人の想像の及びかね候事かと存候。昨年數箇月の間旅順口封鎖の節などは、大將は大抵常に同地より數十里の海面に居られたる事に候が、旅順港外に配置せられたる我が哨艦より、無線電信により日夕敵の情報を受けられ候へば、端艇の港口出入

艦

哨艦

七 無線電信を待ちつゝ

三

介す

に至るまで、殆ど手に取る如くに承知せられ候のみならず、攻圍軍日々の通報の如きも、大連灣碇泊の中繼船を経て、やはり電波の力により絶えず承知せられ、大將も之に應じ、また電波を介して、それ〴〵我が艦隊を指揮せられたりと申す次第にこれあり候。且此の無線電信は、陸上電信線による通信の如くに獨り發信者と受信者との間にのみ通じ候にてはこれなく、電信機械を備へ居候各艦へ同時に知れ渡り候事なれば、各艦とも新聞號外の類を待たず、時々刻々新しく且活きたる情報を即座に承知し得る次第に候。長日月の間困難なる封鎖勤務に於て、全軍に些少

倦怠

趣味津々

の倦怠をも生ぜずして相濟みしは、主として無線電信の賜と相感じ申候。他日若し當時各軍より發せる無線電信の一日分のみにてても一讀致候は、趣味津津たるを覺え申すべくと存候。而して我が海軍の無線電信をして、右の如くに有効ならしめたることは、貴下多年御盡力の功多きに居候事と、ひたすら敬服致居候。惟ふに本邦に於ても、無線電信の事を研究せる人士尠からざるべく存候へども、時局の必要に迫られ、専心一意、學理と實驗とを併せて、貴下程十分に此の事を研究せる人は、恐らくは又他にこれあるまじく、今其の人によりて其の學の好著述世に出て候

期待

巧緻

今はの際

(一)明治三十七年五月十五日の夜、無線電信室に當直せし三等兵曹竹村倉之進、補助を爲せし一等水兵小山晋市に關する事蹟。  
(二)會心 吉野艦長佐伯

事は、誠に科學界の幸福にして、定めて非常なる歡迎を受けられ候はんと、今より期待致居候。殊に貴下が序文中に於て、此の最も新しき科學の發明に係る巧緻なる機械を、最も古くより傳來せる大和魂を以て、今はの際まで泰然として使用せし軍艦吉野無線電信係下士卒の忠烈なる事蹟を紹介せられたる事は、最も會心の點にこれあり、獨り小生が當時の事を回想して感動致候のみならず、亡友佐伯大佐も定めて地下に満足致候はんと察候。此の事蹟たるや、教育上の注意によりては、科學の進歩が決して我が大和魂に何等の障礙をも與ふるものにあら

ざることを證明致候ものにて、識者の舉つて感謝すべき事と存候。

抑、小生共は日夜無線電信の恩澤に浴し居りながら、其の原理の如きは今に了解に苦しみ、却つて他の感想に馳せ候事もこれあり候。即ち開戦以來、我が四千餘萬の同胞が、各其の分に應じて義勇公に奉じつつある至誠天に通じ、一種靈妙にして物質界の電波に對比すべき正氣の活動を起し、出征軍隊と後援國民との間に互に感應して、かく都合よく戦局を進めつゝあるにあらずや、而して其の氣の凝るや、恰も電氣の結んで雷電となれるが如く、或は奮激死に赴く

至誠天に通ず

感應す

從容

決死隊となり、或は從容死に就く吉野電信係の如きものとなり、壯烈鬼神を泣かしむる幾多忠勇の士を現じつゝあるにあらずやなどの感想を起し候事にこれあり候。

がらに無き

餘事はさておき、貴著述に對し、序文御求にあづかり候處、これはとても小生のがらに無き大役に御座候間、平に御斷り申上候。尤も此の拙文中に記載致候事柄にして、何等かの御役に相立ち候ものこれあり候はゞ、御隨意に御使用下さるべく候。まづは他に先だち貴著拜讀の光榮を得候ことの御禮、且は昨年來度々の御懇書、殊に珍しき外國新聞紙の御惠贈に對

目下  
現下

貢獻す

し、何等の御挨拶をも申上げざりし缺禮の御詫を兼ね、右申述候。時下不順の候、益御自愛、斯學の御研究を重ねられ、遠からず貴著標題に二字を加へ、世界無比の無線電信を我が海軍に貢獻せられんこと、切望の至に堪へず候。敬具。

明治三十八年五月二十五日夜、時々刻々、波爾的艦隊見ゆとの無線電信を待ちつゝ。

軍艦磬手電燈の下に於て

島村速雄

木村駿吉殿

—世界の無線電信—

必し文學博士

八 渡鳥の生活科學的 必松本亦太郎

一 鳥類の奮闘

瑞相

梅が枝に飛ぶ黄鳥や、池の面に眠る鴨の姿は如何にも閑雅で、泰平の瑞相として人に愛でられて居るが、鳥の無邪氣で愛らしい有様は、其の家族生活に於て最もよく顯れるのである。サウス・ケンシントンの博物館には、殆どあらゆる鳥の巢が蒐集されてあつて、一々の巢の周圍に剝製の鳥を配置し、親鳥が其の雛や卵を愛育保護する天然有りの儘の状態を直寫して居るが、鳥の表情といひ、周圍の風色といひ、如何にも眞に迫つて居つて、之を見るものは、禽鳥の一家

表情

眞に迫る

本心の眞

親子の情が、如何に楽しく、如何に平和のものであるかを、想像し感歎せざるを得ないのである。如何なる不慈の親も、如何なる不孝の子も、ケンシントン博物館蒐集の鳥の巢を見たならば、必ず其の本心の眞に立返るであらうと思はれる程である。一方より觀る時は、禽鳥の生活ほど喜樂平和の有様を呈するものはない。

奮闘

併し鳥類が右の如き喜樂平和の状態中に棲息するのは、其の生涯の或短時期に過ぎないので、他の方面から觀れば、鳥類の生涯は、實に一大奮闘の生涯である。と認めねばならぬ。しかも鳥類の如く勇ましい

蕃殖

不可抗  
頑頑す

適例

去來現象

奮闘をなすものは、動物中に於て恐らく其の比類が無いと言つてもよい位である。鳥は自己の生存及び種族蕃殖のために他の鳥と相争ひ、或は鳥以外の諸動物と激烈に相戦ふ必要があるのであるが、鳥類の奮闘の最も雄大なる状態は、殆ど不可抗の天然力に頑頑し、其の意志を貫かんと努力する時に於て顯れる。かゝる場合に於ける奮闘は、實に莊嚴なものである。

二 去來の現象

天然力に抵抗して禽鳥が大奮闘をなす適例は、之を其の去來現象に就いて見る事が出来る。此の去來

New-foundland  
北米カナダの  
北部にある大  
島。英領。

現象は、日本あたりでは、春と秋とに最も著しく之を見るので、北方から南方へ向ふものと、南方から北方へ向ふものとがある。即ち自己の生れた郷土に向つて歸り來るものと、自己の郷土から去つて、遠い遠い所へ飛行くものとがある。

禽鳥去來の距離に就いて、西洋の學者は種々研究を試みて居る。黄金鷓はニューフオンドランド附近に生れ、中央亞米利加の諸島あたりまで移住するのであるが、其の距離は千七百哩に達して居る。俗に石返といふ鷓の郷土は、グリーンランド附近であるが、これが冬になると、濠洲或は南米に住むのであるか

(一)南阿弗利加の略。

雙翼

ら、其の旅程は約七千哩に達するのである。此の他南阿及び濠洲に居る鳥で、春になると北氷洋に移るのがある。即ち其の移住旅程は九千哩以上である。地球の直徑は八千哩弱である。小さな雙翼の力を頼みに、八九千哩を飛躍する鳥の勇氣と努力とは、人間の想像し得る所でない。

禽鳥去來の道筋は、最短距離の徑路を取るのてなくして、多くは至つて迂廻して居る。例へばバルチック海濱に棲息する鶴は、阿弗利加に去來するのであるが、最短距離からいへば、アルプス山を越え、伊太利の東海岸を経て阿弗利加に入るべきであるのに、實

(一)Rhine. 歐洲大河の  
 一。瑞西のモ  
 ントゴタルト  
 附近より發し  
 獨逸を流れ北  
 海に入る。

(二)Main. 獨逸の河。

(三)Sicily. 伊太利の南、地中海中の最大島。

死活の問題  
發程

際は然らずして、ライン河に沿うて其の源まで溯り、夫よりメーン河に従ひ海岸に出て、伊太利及びシリ<sup>(一)</sup>の西岸を過つて阿弗利加に入るのである。此の徑路は年々殆ど不變である。旅行には休息の場所や、食餌を得る場所が必要であるのみならず、氣候の關係もあるから、やたら道の取るといふ譯には行かぬ。若し誤つて去來の公道を迷ひ外す時は、種々な障礙に遭つて、遂に其の目的地に達する事が出来ずして死ぬのである。故に正當な去來の道筋を知るといふ事が、鳥類に取つては死活の問題になるのである。然るに移住發程の季節に於ては、幼鳥が一種の旅行

熱に浮されて、親鳥の出發を待つことが出來ず、無經驗をも顧ずして無鐵砲に飛出し、正當の道筋が判らず、途中に迷うて死ぬこともあるのである。かゝる次第であるから、概して群をなして去來するといふことが、禽鳥の爲に極めて必要なものであつて、幼い鳥は老いた鳥から去來の公道に當る原野や、山脉や、谿谷や、河流などの形勢を學びながら、飛行かねばならぬのである。

禽鳥の飛行の速力は随分大なるものである。一二の例を擧げて見んか。鶉が海などを渡り去來する際には、一時間三十八哩位の速力で飛んで行くのである。

東京から大阪までは、最急行列車でも十一時間を要するのであるが、鶉は之を九時間で飛んでしまふ割合である。鳩は四十三哩以上の速力で、随分遠距離を飛ぶのであるから、東京大阪間の汽車道ならば、八時間位で之を通過してしまふ割合である。競馬の記録に遺つて居る最も迅速な馬は、三哩競争に一秒十五六ヤードの速力を以て走つて居るが、燕は一秒に四十九ヤードの速力で飛ぶのである。のみならず競馬は長い間練習させても、以上のやうな速力を保つて走るのは、僅か六分か七分に過ぎないが、或鳥類は數日間毫も翼を休めること無しに、大速力で飛ぶこ

Yard.



とがある。

渡り鳥日記

九 詩的農園 美

菊池 幽 芳 の

詩趣

(一)北海道帝國大學農學部の畜稱。

札幌に於て最も詩趣に富める地を求むれば、蓋し札幌農園か。札幌農園は農科大學に附屬せるものにして、實に我が邦の模範農園たり。農園としての設備、完全なるに近きのみならず、地は即ち石狩平野の一部なるが故に、到底内地にて求むべくもあらぬ廣大なる地域を領し、凡百の施設整頓して少しの遺憾を感ずる無く、經營の手腕は縦横に發揮せられて餘蘊無きに近し。然れども余は茲に農園の設備を説かん

凡百 餘蘊

風致

障屏 紫翠

相凌ぎ相排す

星の雫

亭々

とするものにあらず。余の記さんとする所は、唯其の風致にあり、農園の粹たる廣き牧場の風致にあり。西北の二面全く開け、平野遠く連りて、西は遙かに札幌の障屏をなせる連山の紫翠に接し、北は石狩原野を指して、其の際涯を知らず。萋々たる牧草氈の如き處、こゝにはかの林中の雜樹の、互に相凌ぎ相排するが如きこと無く、廣き空間を占めて處まばらに立てる榆ありて、晝は残る隈無く日の光を浴び、夜は思ふが儘に星の雫を受く。何に遮らるゝものも無き其の根は、太古の儘なる土壤より、潤澤なる養分を吸取りて、鬱蒼たる其の枝葉は以て百歩の地を蔽ひ、亭々

ming

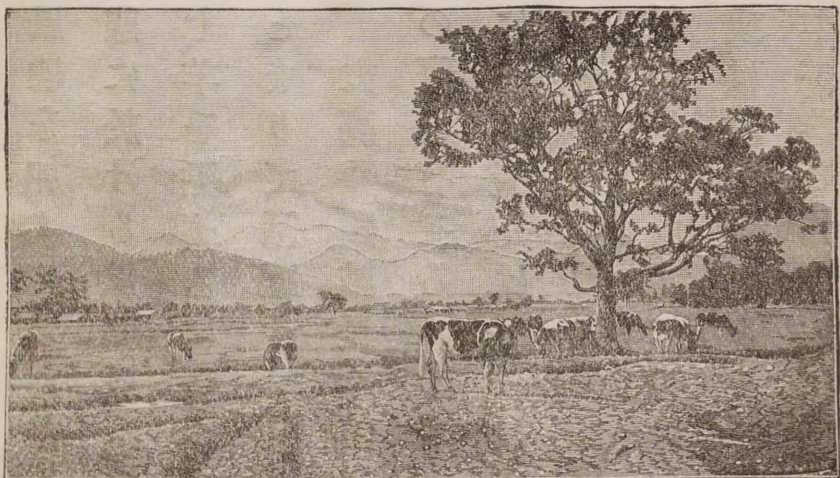
たる其の幹は以て百尺の空を摩す。一たび足を此の農園の牧場に入る、もの、誰か遺憾無く發揮せられたる此の楡の美に驚歎せざらん。

それ廣漠たる平野の緑は、既に人の心を快潤ならしむ。これに喬木の亭々たるを配する時、誰か一段の風致の添來るを覺えざらん。唯其の喬木の種類によつては、又其の風致に多少の増減無き能はず。思ふにかゝる平野を飾るに適せる樹木は、松にあらず、杉にあらず、實に其の高さと共に深さを有し、深さと共に又其の幅を有するもの、分明に言へば、其の枝葉十重、二十重に密生し、鬱然として晝猶暗き樹蔭を作る喬

ば分明に言へ

書の如く詩の如し

腦裡に描く



園 農 幌 札

木たらざるべからず。請ふ、かくの如き喬木の、森々として青緑の平野に立てる様を想像せよ。何ぞ其の畫の如くにして、又詩の如くなるや。人若し十分にかゝる想像を回らすことを得たりとせば、其の人は即ち遺憾無く札幌農園を其の腦裡に描き得たるなり。農園が楡によつて其の

風趣  
靜態  
點す  
動態  
活躍

風趣を加ふることかくの如し。然れども、これをほ靜態に於ける風趣のみ。更に此の間に牛を點じ、馬を點じ、羊を點ずるに至つて、農園の眞風趣は始めて動態となりて活躍す。

〔Holstein.〕

丈高く、四肢長く、體軀驚くべき程巨大にして、黑白の斑を有せるホルスタイン種の牛が、其の大樹の下

〔Ayrshire.〕

に、一は横たはり、一は立てる、或は長方形の體軀をなせる赤色の短角牛、眼優しく四肢短きエイアシャー

〔Merino.〕

種の牛が、此處に彼處に草を食へる、或はさまよへる、或は尾をふれる、更に麗しき毛を被れるメリノ種の羊が、其の角の大にして曲れるには似ず、いと優しき

樂園

眼光もて、馴々しく近づき來るを見ずや。若し此の世に樂園といふものありとせば、其の關門は實にかくの如き處なるべし。

其の繪畫的なる、其の詩的なる、また附近の建物と相待つて其の米國的なる、少くともこゝに來るものは、内地の光景と甚だしく相隔れるを感ずるならん。余は札幌農園を自然の師として學べる學生の幸福を祝し、また此の學校より、往々文章の士を出せることの、決して偶然にあらざるを知れり。

ふ先生の米國、  
先生をバシリ、  
併し、然ら  
ザルナリ。

— 日本海周遊記 —

一月七日  
三月三日  
五月五日  
七月七日  
九月九日

一〇 初夏の感

大町 桂

月 土佐 家

春盡きて夏來る。之を人生に譬ふれば、少年期を過ぎて青年期に入りたるなり。古來五月五日を男子の祝日とす。新緑地に満ち、鯉幟勇ましく、天空に舞ふ。吹く風も暑からず、寒からず。笥此の際地を劈いて出づ。蕨も出づ。燕は舊巢に來り、雲雀は啼いて天に昇る。あらゆるものみな蘇生して、生々潑刺の氣、天地に満つ。これ初夏の特徴なり。青年期の特徴も亦之に類す。身體も忽ち見違ふばかりに發達し、精神も亦非常なる速度を以て發達す。請ふ、其の感受性を正しく向上せしめよ。其の生々の氣力を善用せよ。率直にして曲ら

生々潑刺の氣

感受性

素因

ざれ。無邪氣にして儼まざれ。餘りに早く老成的にかたまらざれ。横に張るよりは上に伸びよ。大いに發達するの素因自ら其の中にあるべし。――すゝりの水――

一一 青蘆の影

徳富 蘆花

青葉茂りて村々綠に埋れ、蘆のびて川狭うなりぬ。川の上流に立ちて村の彼方に沈む日を見る。日は已に山の端にかゝりて、山は青黒き林の梢に絶え絶えの紫を見せたり。潮次第に満ちて川逆に流れ、一抹の泡、雪の浮べるが如く、青蘆の影を掠めて溯りゆく。彼方の岸に四手

一抹の泡

網あり。人は蘆に隠れて見えぬど、四手をひきあぐる毎に網は夕日を帯びて、紫金色にきらめき、玉の如き水、川の面に滴る。

殘照

やがて日は山に落ちぬ。殘照林端の空を紅に染めて、水にも其の色流れぬ。潮は愈、川に満ち、殘照を浮べ、青蘆の影を載せ、白き泡を運び、紺色の林影を漂はして、將に小さき板橋をも浸さんとす。魚あり、時々林影の中に跳ねて、紺青の水に白き渦をわかしぬ。  
夕風そよ吹き、殘照も次第に薄うなりぬ。何處の寺の鐘の音か、響遙かに野末をわたる。  
やがて地は青黒う暮れ、人家の障子に燈火紅に見

えそめぬ。

—自然と人生—

一二 桶狹間の戰 其の一 遠山信春

織田上總介信長公、清洲の城に御座ありけるが、近日鳴海に出向ひて無二に今川と一戰を遂ぐべし。と仰せらる。林佐渡守等、敵は四萬に及ぶ大軍なり。味方三千の御人數にて、平場の御合戰、對揚すべき事にあらず。只此の城に立籠らせ給ひて、敵を切所に引請けて戰はせられよ。と諫め申し上げけれども、此の儀少しも御承引なし。  
さる程に五月十八日の夜に入りて、敵は大高に參

(一)尾張國四春日井郡。  
(二)尾張國愛知郡。

對揚

切所

承引

(三)永祿三年。  
(四)知多郡。桶狹間の西北一里半。

(一)知多郡。

猿樂

更前後  
 三更  
 三更  
 三更  
 三更  
 五更  
 智慧の鏡も曇る  
 笑止

着の由丸根の城佐久間方より脚力を馳せて申し上げけり。信長公御家老を集められしに、軍の評定はこれ無くして、唯世上の御雑談にて御酒宴に及ぶ。宮福大夫といふ猿樂、羅生門の曲舞をなし、兵の交、頼ある中の酒宴かな。と謠ひければ、殊の外御感有りて、黄金を下され、既に夜も深更に及べり、各宿所に歸りて支度あるべし。とて出されけり。家老の面々互に顔を見合せ、口々に、日比は良き大將なれども、御運の末と相見え、智慧の鏡も曇るやらん、通堂したる軍の御工夫も出でぬと見えて笑止なり。と言合ひて歸りけり。かくて其の夜の明くるを待たせ給ひけるが、夜既

(一)知多郡。注進

物具

に明方の事なるに、(一)鷲津の城より注進あり、敵只今鷲津丸根両城へ人數を取掛け候。と追々申し來る。信長少しも騒ぎ給はず、敦盛の舞の人間五十年、下天の内を比ぶれば、夢幻の如くなり。一度生を受け、滅せぬ者のあるべきか。といふ所を繰返し舞はせ給ひて、さらば螺貝を吹立て、具足具足をおこせよ。と仰せられければ、小姓衆乃ち御鎧を奉る。靜かに御物具を召固め、立ちながら御食を三杯まゐり、御冑の緒をしめられ、太く逞しき栗毛の駒に召されつ、閑々と御出馬なり。御供の小姓衆御寵愛の岩室長門守を始め、長谷川橋介、山口飛驒守等主従六騎、其の外雑兵二百餘人、熱田ま

擁護

(一)熱田神宮の門前約半町。俗に智慧の文珠といふ。

で三里の間を一時に駈附けられ、熱田大明神の旗屋口に着かせ給へば、諸勢方々より馳参じて、はや千騎になりぬ。當社大明神へ御参詣ありて、合戦の勝利の御祈願を掛けられ、一通の願書を籠めさせ、やがて社頭より御旗を進め給へば、白鷺二つ御旗の先に飛行くを、あれこそ當社大明神の擁護し給ふ驗よ。とて、諸勢を勵まし進まれけり。

源大夫の宮の前より東を御覽ずるに、丸根山、鷺津山、両城ともに落城と見え、黒烟雲に連りて夥しければ、少しも早く馳附けたく思し召す。濱手よりは近道なるに、それさへ今朝は満潮さし入りて、馬の通ひも

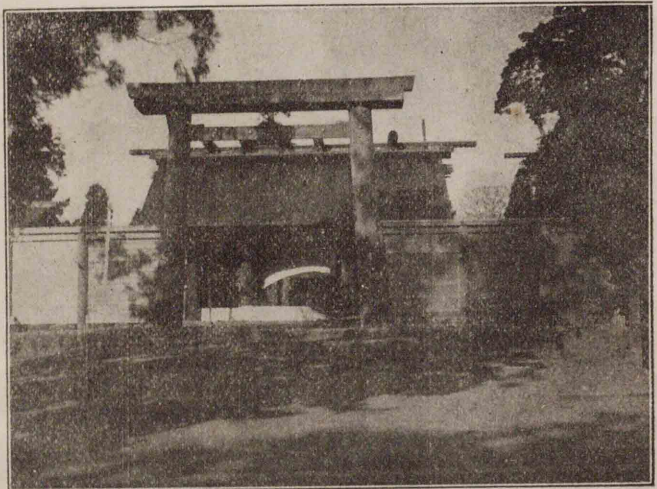
七カミシノミタ

(一)愛知郡呼樓の南。

揉みに揉み

勢揃

披露



熱田神宮

叶ひ難し。其の日の辰の刻に、漸々熱田より笠寺の東

上道の細繩手を、揉みに揉みて驅けさせられ、道々の岩の人数を召集め、やがて善照寺の東の狭間にて勢揃ありけるに、漸く三千許なりけれども、五千の人数とぞ披露有りける。

さて信長公御軍謀には、敵の先手の大軍を皆本道に遣過して、當方の人数はひそかに山の陰に廻り行

興に入る

きて、義元の本陣へ一度にどつと突掛り、切崩さんとの結構なり。義元之をば知らず、桶狭間の山下の芝原に敷皮しかせ、先手の者共が鷺津、丸根の両城を攻落せしを大いに悦び勇み誇りける處へ、近郷の寺社の僧、社人等、悦の樽を進上しければ、即ちそれにて酒宴を始め、謠をうたひ興に入る。熱田表には織田方の先陣佐々隼人、千秋四郎等人數二百許にて、信長公の御旗を待受け、山際に控へ居たる駿河勢へ打つて掛る。佐々、千秋小勢なれば取圍まれて、五十餘人討取られ、駿河勢勝誇りて、隼人、四郎両將の首を取りて槍の先に差上げて、一度にどつと鬨を作る。しかのみならず、

天魔波旬

信長公の寵臣岩室長門守も、拔駈して討取られぬ。佐佐、千秋、岩室三人の首を本陣に遣はし、義元に見せ奉れば、義元愈、勇み誇りて、某が鋒先には、いかなる天魔波旬なりとも堪るまじ」と宣ひて、なほ勝軍に驕を極め、酒宴に耽りて居給ひけり。

一三 桶狭間の戦 其の二

さても信長公は、これより中島へ移りて合戦を始めんと宣ひければ、人々大將の謀を知らず、池田勝三郎、毛利新助、林佐渡守、柴田權六等御轡に取附きて、こゝは両方深田の中一騎打の細道なり。之を通り過ぎ

一騎打



あせる  
勿體なし  
無理無體

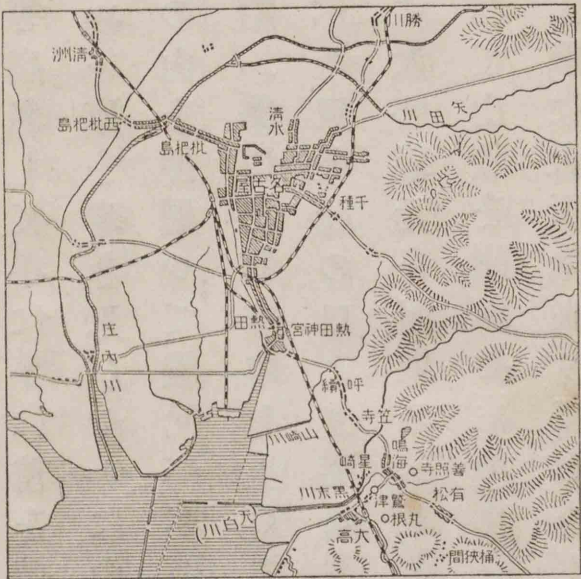
給はゞ、無勢の様體敵方よりさだかに見透かし侍るべし。其の上勝をあせりて、威勢強き敵の中へ此の小勢にて向はれんこと、勿體なき次第なり。たゞ切所に待受けて御合戦候べし。」と各諫言申しけれども、無理無體に振切つて、中島へ移らせ給ひ、中島よりまた討出でんとし給ふを、なほも彼の面々聲々に止め申しけり。

其の時信長公人々を顧て、凡そ合戦の習は、勢の多少によるべからず。殊更此の敵は昨日は大高城へ兵糧を入れ、また今朝は鷺津、丸根兩城の合戦に精を盡し、辛苦艱難して、疲れ果てたる人數なれば、大勢とい

新手  
思ひ切る

ふとも猛からず。此方は新手にて思ひ切りたる軍兵

安堵



なり。敵の思ひもよらぬ所へ、無二に掛つて突崩さば、なか勝利を得ざるべき。」と大音聲に下知し給へば、一同げにもと安堵しけり。

さて今日の合戦は、首取るべからず、打捨なるべし。此の軍場へ出づる者は、家の面目、末代の高名たるべし。」とて、諸勢をいさめて掛り給ふに、先驅の前田

犬千代生年十八歳、毛利河内、森十助、木下雅樂助、中河金右衛門、佐久間彌太郎、森小助、安倉彌太郎、魚住隼人等、高名して、手に手に首を持來る。信長公御感有りて、「皆々旗を卷き、忍びやかに山際まで押附け、敵勢の後の山を押廻つて、義元が本陣に討つて掛れ。」と下知し給ふ。築田出羽守申し上ぐるは、「敵の後陣は先陣たるべし。只今此の口より突掛り差向はせ給ふならば、必ず大將義元を討取るべし。」と申しければ、さらばと、忍びて山際を廻らせ給ふ。

俄に大雨降來りて、石などを投ぐる如く敵の顔へ風吹きかく。敵の爲には向風、味方は後より吹く風

(一)愛知郡。

なり。餘りに強き風雨にて、沓掛の上の山に生ひたる二かい三がいの松の木、楠の木なども吹倒すばかりなり。これ只事にあらず。熱田大明神の神軍か神風かなんどといふ程なれば、味方の大勢廻り來る物音少しも敵に聞えず。やがて雨の晴間を御覽じ、晴天になるとひとしく、信長公槍追取つて眞先に進ませ給ひ、「掛れ。」と大音あげて下知し給ふを、森三左衛門申しけるは、「味方おり立ちて掛るならば、敵きつと備ふべし。唯此のまゝ馬を入れて、乗崩し給へ。」といふを、尤もなり。とて、毛利新助、織田造酒丞、築田出羽守、中條小市郎、遠山甚太郎、同河内守等、大將に打續いて一度に

裏切

算を亂す

馬をどつと入れ、其の勢勇みに勇んで、黒煙を立て、  
馳破れば、敵陣思ひも寄らぬ所へ俄かにかゝられ、心  
ならず、後へさつと崩れたり。敵ども餘りにあわて騒  
いで、「喧嘩か」と言ふ者もあり。謀叛か、裏切か」と思ふも  
あり。取捨てたる弓、鐵砲、旗指物は算を亂すに異なら  
ず。中にも義元の乗給ひし塗輿を捨置きたり。信長公  
是を御覽じ、敵の旗本疑なし。愈、追詰めよ」とて、同未の  
刻、東へ向いて追掛け給ふ。

初は敵三百ばかり義元を圍んで退きけるを、手し  
げく追附けらるゝにより、二三度四五度取つて返し  
討死して、次第々々にまばらになり、後には漸々五十

しのぎを削  
り鏢を破る

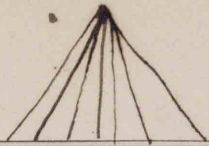
騎許取つて返して戦ふ處を、信長を初として、皆々馬  
より下立ちて、荒武者互に先を争ひ、しのぎを削り、鏢  
を破りて、切先より火焰を出し、散々に戦ひける程に、  
手負死人は數を知らず。今川義元は無双の勇者にて、  
なほこれまでも騒がず、諸勢を下知し居給ふ所を、織  
田方の服部小平太、槍を以て突通したり。義元太刀を  
抜いて、小平太が膝の口を一刀切割き給ふ。小平太尻  
居に切附けられて、起上ること叶ひ難し。毛利新助來  
りて、透間無く切つて掛り、義元の首を取らんとす。義  
元組伏せられて、はや刀にて切ること叶ひ給はず。  
新助が人差指にかつばと嚼付き、終に其の指を食切

したゝかな  
る者

り給ふ。新助元よりしたゝかなる者なりければ、指を食切られながら、押附けく、義元の首を取る。義元今年四十二歳なり。

なじかはた  
まるべき

残る敵どもなじかは少しもたまるべき、總軍一度に敗北して、四方八方へ崩れ立ち、後より逃ぐる味方を、敵の追ふよと見損じて逃散る所を、此處に押詰め、彼處に追詰め、思ふ儘に攻附けけり。抑、此の桶狭間といふ所は、山のはざま深田の邊にて、高み卑み打茂り、足場何れも切所なれば、逃行く者ども一入に途方を失ひ、悉く討取られぬ。味方の若者ども追附きく、首二つ三つ宛討取り、御前へ参りけるを、餘の首は清



洲にて御實驗あるべしとて、義元の首ばかりを御一覽成され、御馬の先に其の首をもたせ、勝鬨を作つて、其の日の申の刻に、清洲を指して御凱陣あり。首帳を記されけるに、二千五百とぞ聞えける。之よりしてこそ、信長公の名譽は天下に轟きけれ。

— 總見記 —

一四 武士道

東京、學問院、大森金五郎

大和魂と武士道とはどういふ風に異なるかといふに、大和魂とは日本の魂、即ち日本人の尊王愛國の精神を指していふので、武士道とは、源平時代から、大和魂が多く武人に依つて現された所から名づけら

草むす

本領

れたのである。然らば武士道は源平時代に始つたものかといふに、決してさうではない。此の精神は、我が建國以來の風といふべきで、萬葉集にも、大伴家持の家庭教育に關する歌が載せてある。其の大意は、大伴佐伯の両氏は武勇の家筋であるから、祖先の名をば汚さぬ覺悟で、赤き心を以て朝廷に仕へ、勅命を蒙つた場合には、海へ行かば屍を海に沈めても厭はず、山へ行かば屍に草がむしても厭はず、私なく仕へ奉り、大君の邊で死ぬるを本分とする。といふのである。是が古から日本の武士の本領であつたのである。前九年、後三年の役などに際しても、源頼義義家父子によ

推賞鼓舞

つて、武勇の精神が推賞鼓舞された。鎌倉時代に至つては、取分け源頼朝が武士道を獎勵し、自身に質素儉約を以て衆を導いて行つたから、武士の風儀が益々良くなり、一種高尚なる美風を生じた。

扈從

廉耻

武士道といへば、強くさへあればそれで宜いといふ譯ではない。主從の恩誼を重んずるといふ事が第一義である。それから、一旦約束したことは、一命を棄て、之を守り、また廉耻を尊び、人から卑怯だとか未練だとか言はれるやうなことがあるれば、腹をも切るだけの膽力がなくてはならぬ。是が當時の風であつた。源頼朝は常に扈從の武士を吟味して擇び、武士も

扈從に加ふことを名譽とした。頼朝は嘗て言ふやう、  
 「二十矢を發して二十騎を射殺す程の精兵でなければ、我が調度懸にすることは出来ぬ」と。調度懸とは、將軍の弓矢を負うて扈從する武士をいふのである。又「我が隨兵の侍は、三徳を備へなければならぬ。三徳とは、第一に譜代の武士である事。第二に弓馬の道に熟達して居る事。第三に威儀容貌の立派であるといふことである」と。かやうな譯であるから、京都の公卿達が、平安時代以來の風をうけて奢侈文弱に流れ、遊樂を事として居る間に、鎌倉武士は犬追物、笠懸、流鏑馬等を以て日常の遊戯とした。

譜代

弓馬の道

嗜

されば此の時分の武士の嗜といふものは、自分は平生質素儉約を旨として居ながら、數多の郎黨を養ひ、良い馬を飼ひ置き、一旦事變があつたら夫等の郎黨を率ゐて、主君の爲に勳功を立てるといふ事が、第一の目的であつた。併し武士道を鍛鍊する所から、自然粗暴になり易い爲に、之を十分戒めた。嘗て近江の佐々木高重が比叡山の僧侶に抵抗して、それが爲に死罪に處せられようとしたのを聞き、頼朝は之を憫み、其の父定綱に悔状を送つた。其の文の中に「若き者の癖といひながら餘りに心とく、逸り過ぎたる者よと御覽ぜしに、案の如く心短く物騒がしく、父兄弟に

も咎をかけ、天下の大事ともなれり。事の序なれば仰せらるゝぞ。定綱は猶も子供を持ちたれば、いで教へよかしと思し召すなり。武士道といふものは、僧などの佛の戒を守るなるが如くに有るが本にて有るべきなり。大方の世の固めにて、帝王を護り參らする器なり。又當時は鎌倉殿の御支配にて、國土を守護し參らする事にてあれば、錐を立つる程の所を知らんも、一二百町を持ちても、志はいづれもひとしくて、其の酬に命を君に參らする身ぞかし。私の物には非ずと思ふべし。さるについては、身を重くし、心を長くして、あだ疎かにふるまはず、小敵なりとも侮る心なく、

あだ疎か

物騒がしからず計らひたばかりをするが能事にて有るぞ。云々と書いてある。是はよく武士の心得を書いたもので、武士の精神はかくあるべきである。

平家は武人から出たが、早くから京都の公卿風を見倣つたため、武士道は發達しなかつた。鎌倉時代の武士の風儀は、大略上述の通りであるが、後に京都から攝家の將軍や、皇族の將軍を迎へるに及び、數多の公卿達も之に附いて來たので、武士も之に見習ひ、次第に奢侈の風が行はれ、武士道も段々弛んで來た。ついで北條氏が滅びて建武中興となり、又政權が足利氏に移るに及んでは、尊氏が逆を以て天下を取つた

文教

から、一般の武士も之に見習ひ、風儀はいやが上に廢れた。そこで當時の落書にも「四夷を鎮めし鎌倉の、右大將家の掟より、唯ひんのありし武士も、皆なめんとらにぞ今はなる。」といふことが書いてある。右大將家といふのは頼朝の事で、頼朝が掟を立ててから、鎌倉の武士は皆品格があつたのであるが、今はそれが、滅茶滅茶になつたといふ意であらう。それから足利時代に至つては、引續いて風儀が良くなかつた。それを信長や秀吉が引締めて行き、ついで家康が出て文教を勧め、人道を辨へさせたから、武士道が又々盛に起つたのである。やがて武士ばかりではない、町人の中

冥々の裡

にも俠客などといふものが出て、一種の俠氣を養成したから、所謂大和魂といふものは、武人の間のみではなく、市井の間にも行はれ、彼の軍談、辻講釋等にて讀上ぐる所も、忠勇なる武士の美談や、勇ましい俠客の事蹟等であつて、冥々の裡に婦女や子供までにも、武士道を教へ來つたのである。

—大日本全史—

一五 英、佛、獨の國民性 和田垣謙三

髣髴せしむ

個人に個性あるが如く、國民には國民性あり。或はこれを國民心理ともいふ。茲に英、佛、獨三國民の心理的特色を髣髴せしむる面白き一の假設談あり。



倉皇旅裝を  
整ふ

今試みに、象は如何なる動物なるか。といふ問題が、英、佛、獨の三國人に課せられたりとせよ。英人は倉皇旅裝を整へて、印度或は阿弗利加等象の産地に赴き、實地に其の生立よりの生活状態等を目撃して、精細に之をノートブックに記入すべし。其の記事は或は前後し、或は錯綜して、要領を缺く點なきに非ずと雖も、材料は確かに之を其の本源より蒐集し來りしものにして、些の想像憶説を其の間に挿まざるなり。佛人は即ち早速動物園を訪ひ、其處に繋げる一頭の象に近寄り、尺を以て其の身體各部の寸法など丁寧に度り、又筆を執つて其の形體色合を巧に描寫し、

〔Note-book〕

行文流暢  
理路整然

而して極めて明確巧妙に、眼のあたり之を見るが如く、其の體格、資性、習癖等を書きつらぬ、行文流暢、理路整然たる報告を作るなるべし。

獨人は如何。彼は全然筆法を異にし、他の英、佛兩人の答案成るを待つて、始めて着手す。即ち辭を卑うして兩人に答案の借用を懇望し、之を得るや書齋に閉籠り、兩答案を机上に置きて、左顧右眄、まづ佛人の答案より意見の大要を抜寫し、更に英人の答案より之を證明する材料を索め來りて、比較的、批評的の一文を物し、之に自家の理論を附加して、英佛兩人の報告に見る能はざる、而も其の論據と材料とは、其の中に

左顧右眄

物す

長所

存する一種編纂的の答案を作るべし。

要するに、英人の答案の特長は動的なるにあり、而して長所茲にあり、短所亦茲にあり。佛人の特色は靜的なるにあり、而して長所茲にあり、短所亦茲にあり。獨人の特色は即ち動靜兼備り、清濁併せ吞むにあり、而して其の長短亦同じく茲にあるなり。——吐雲錄——

一六 山 寺

若 山 牧 水

眼が覺めて見ると、雨戸の隙間が明るくなつてゐる。雨はと思ふと何の音もせぬ。もう寺の爺さんも起きた頃だと、勝手元の方に耳を澄しても何の音もせ

ぬ。暫くすると、朗かに啼ぐ鳥の聲が耳に入つて來た。何とまあ、鳥の種類が多いことだらう。あれかこれかと、心あたりの鳥の名を思ひ出して見ても、とても數へ切れぬ程の種々の音色が、枕の上に落ちて來る。私は耐へきれなくなつて飛起きた、そして雨戸を引明けた。

照るともなく曇るともなく、燻り渡つた一面の光である。見上げる杉の木立は、次から次と唯靜かに押並んで、見渡す限り微かな風の氣勢もない。それからそれと眼を移してゐた私は、ふと、杉の木立の間に、遙かに光る處を見出した。籠の琵琶湖である。何處から

何處までと、その周圍は解らないが、とにかく朧々とその水面の一部が輝いてゐる。

餘りに静かな眺なので、我を忘れてぼんやりと其處らを見廻してゐると、又一つの物が目に入った。眼前から直ぐ落込んで行つてゐる窪地一帯は、ちやうど溪間の様になつて、僅かの間杉木立がとだえて、細長い雑木林となつてゐるが、其の藪の中をのそりのそりと半身を屈めながら、何か探してゐる人が居るのである。頭を丸々と剃つた大男の、紛らふ方なき寺男の聾爺さんである。それを見ると、妙に私は嬉しくなつて、大聲に呼びかけたが、無論彼は振向かうとも

しなかつた。後庭に降りて、笕の前で顔を洗つて居ると、爺さんは青々とした野生の獨活を提げて歸つて來た。こんなものもといひながら、筍をも二三本取出して見せた。

この寺は、比叡の山中に残つてゐる十六七の古寺の中、最も奥に在つて、又最も廢れた寺であつた。住持もあるにはあるが、麓の寺とかけ持ちで、何か事のある時のほか、滅多には登つて來ず、年中殆ど、この寺男の爺さんが一人で留守居をして居るのである。四方面に杉の林があるのみで、しかも溪間の行きどまりになつた處に在るために、根本中堂だの、淨土院だの、

(一)延暦寺の本堂。延暦七年建傳。大師の創

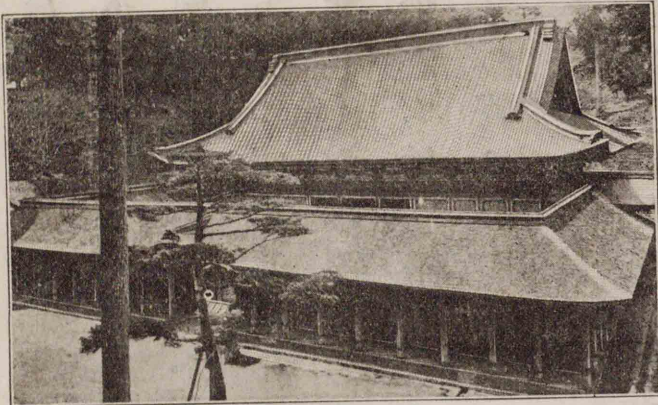
(一)比叡山の最高  
峯。二七二三  
尺。  
(二)山城國愛宕郡  
八瀬村の東。

釋迦堂だの、又は四明嶽、元黑谷などへ往來する參詣人たちも殆ど立寄る事なく、まる一週間滞在してゐる間、私はこの金甕の爺さんの外、人間の顔といふものを餘り見る事なくして、過してしまつた。

多いのは唯鳥の聲である。大正十年が當山開祖傳教大師の一千一百年忌に當るといふ舊い山、そして五里四方に亘ると稱へられる廣い森林、その到る處が殆ど鳥の聲で満ちてゐる。

朝最も早く啼くのが郭公である。くわつくわう、くわつくわう、と啼く。鋭くして澄み、而もその間に何ともいひ難いさびを持つたこの聲が、山や溪の冷たい

肌を刺すやうにして響き渡るのは、大抵午前四時



比叡山根本中堂

前後である。この鳥の啼く時、山は全く鳴りを静めてゐる。「くわつ」と鋭く高く、さうして直ちに「くわう」と引くその聲が、ほゞ二つか三つ、或場所で續けざまに起つたかと思ふと、もうその次は、異なつた或頂上か、溪の深みに移つて居る。暫くも同じ處に留つてゐない。そして殆どその姿を人に見せた事がない。

杜鵑も朝が多い。これは必ず最も高い梢でなくては啼かぬ。この鳥も二聲か三聲しか聲を續けぬが、どうかすると、取亂して啼きたてる事がある。その時は、例の「本尊かけたか」の律も破れて、全く急迫した亂調となつて来る。日のよく照る朝などは、聽いてゐて息苦しくなるのを感じる。この鳥は聲よりも、峰から峰、梢から梢へ飛渡る時の姿が誠に好い。それから、高調子の聲に混つて、何といふ鳥だか、大きさは燕ほどで、その尾の一尺位長いのがゐて、細々と、實に細々と息を切らずに啼いてゐるのがある。これは下枝から下枝を渡つて歩いて、時には四五羽、その長い愛らしい

尾を連ねてゐるのを見る。

日が闌けて、木深い溪が日の光に煙つた様に見える時、何處から起つて来るのだから、大きな筒から限りもなく抜け出して来る様を聲で啼きたてる鳥が居る。始もなく、終も無い。聽いて居れば、次第に魂を吸取られて行く様に、寄邊ない聲の鳥である。或時は極めて間遠に、或時は釣瓶打ちに烈しく啼く。この鳥も容易に姿を見せぬ。聲に引れて、どうかして一目見たいものと、幾度も私は木の雫に濡れながら、林深く分入つたが、終に見る事が出来なかつた。筒鳥といふのがこれである。筒鳥の聲は、極めて圖抜けた間の抜けた

寄邊ない

ものであるが、それを稍小さく、且人間くさくしたものに呼子鳥といふのが居る。初め筒鳥の子鳥が啼いてゐるのかとも思つたが、よく聞けば全く異なつてゐる。山鳩にも似、又梟にも近いが、そのいづれとも違つた、やはり呼子鳥としての、いひ難いさびを帯びた聲である。

數へれば際限が無い。晴れた朝など、此等の鳥が殆ど一齊に、其處此處の溪から峰にかけて啼きたてる。茫然と佇んで耳を澄す私は身體全體の痛み出す様を感覺に襲はれる事が再々あつた。——比叡と熊野——

一七 山の聲

國木田獨歩

峰より峰に風わたり、

遠ざかり行く其の聲を、

聞きすます間に水の音、

溪より溪にひびくなり。

風聲遠く、水近し。

水の音にもあらぬ聲、

風の聲にもあらざるは、

月にうかれて山がつの、

友がり行きて歸るさの

友がり

山路越えつゝ、うたふなり。

あはれ其の聲たえぐに、

風にまじりつ水音に

絶えつ聞えつ遠ざかり、

末は嵐となりにけり。

風聲遠く、月さむし。

— 獨歩全集 —

(Solon) 古代希臘の賢人。西曆紀元前六三八一—五九

の貧人なり。(ソロン) 足るを知るは眞の富人にして、貪慾飽く無きは眞

一八 西哲の訓言

(Plato) 希臘の哲學者。西曆紀元前四二九—三七

勝は己に克つより大なるは無し。(プラト) 怠惰はなほ鏽の如し。使用せざる鍵は鏽によりて

腐蝕し、日常使用する鍵はまづ光輝を放つ。(フランク

(Franklin) 米國の理學者、政治家。西曆一七〇

リン) 習慣は性質に十倍す。(ウェリントン) 食物に香味と調味との必要なるが如く、友情は人

(Wellington) 英國の將軍。西曆一七六九—一八五

生の香味と調味となり。(リチャードソン) 無用に生くるは、若くして死すると擇ばず。(ゲーテ)

(Goethe) 獨逸の文學者。西曆一七

人は昇る時は止ることを得れども、降る時は止ること能はず。(ナポレオン)

(Napoleon) 佛蘭西皇帝。西曆一七六九—一八二

一九 蟻と蟬

家の側面にある白樫の下には、蟻が黒く長く一列になつて進軍して居る。彼等の或ものは、大きな家寶である食糧を擔いでゐた。少し大きな形の蟻がそこらに配置されて、彼等に命令して居るやうにも見える。彼等は出會ふ時には、或は會釋をするやうに、或は噂をし合ふやうに、或は言傳を託して居るやうに、両方から立停つて、頭を突合せて居る。これはよくある蟻の轉宅であつた。

そこから立上つて歩み出さうとすると、ふと目に入つたのは、その白樫の幹に道化した態をして、牙のや

會釋

道化

けはひ

うな形の大きな前足をそこへ突立て、嚙りついて居る蟬の脱殻であつた。それは背中の真中からぱつくり裂けた、赤くびか／＼した小さな鎧であつた。なほその幹をよく見て居ると、その脱殻から三四寸ほど上の所に、一疋の蟬がじつとして居るのを發見した。人のけはひに驚く風もないのは無理もない。その蟬が今生れたばかりだといふことは、一目に解つた。まだごく軟で、體も固つては居ない。この蟲はかうして身動もせず、じつとしたまゝ、靜かに空氣の神秘にふれて居るのであつた。その軟な、まだ完成しない羽は、全體乳色で、言ふばかりなく可憐で、痛々しく小さ



くちゝかんでゐた。たゞその爽かな快活な緑色の筋ばかりが、ひどく目立つた。その色ばかりではなく、羽全體が植物の芽生に髣髴して居た。生れ出るものには、蟲と草との相違はありながら、共通な或姿が、その中に示されて居る。尙凝視すると、この蟲の平たい頭のちやうど眞中あたりに、ごく微小な、紅玉色で、それよりもつと燦然たる何ものか、見事に縷められて居るのであつた。それは科學上何といふものか、多分單眼といふものででもあらうか。

蟬といふものは二十年目位にやつと成蟲になるといふやうなことを、何かで知つたやうに思ふ。あゝ、

蛙鳴蟬噪

この小さな蟲が、唯一口に蛙鳴蟬噪と呼ばれて、人間には無意味に見える一生を營むために、二十年も経てゐようとは。さうして彼等の命は僅かに數日——二日か三日か一週間であらうとは。自然は一體、何のもりでこんなものを造り出すのであらう。

蟬の羽は見て居るうちに、目に見えて、そのちやうくそれが引延された。同時にその半透明な乳白色は、刻刻に少しづつ、併し確實に無色透明なものに變化して來るのであつた。さうしてあの芽生のやうに爽快ではあるけれども、ひ弱げな緑も、それに應じて段々と黒ずんで、恰も若草の緑が、常磐木のそれになるや

現實的

うな、或現實的な強さが、瞭らかにこゝにも現れつゝあるのであつた。

—佐藤春夫、田園の憂鬱による—

二〇 夕立雲

徳 富 蘆 花

今日早夕飯を食つて居ると、北からひいやりと風が來た。眼を上げると、果して、果して、北に一團紺靨色の雲が立つて居る。其の紺靨の雲を背にして、こんもりした隣家の杉や、檜の木立、孟宗竹の藪などが、生々しい緑を浮して居る。

「夕立が來るぞ。」

主人は大聲に呼んで、手早く庭の干物、履物などを

天の馬の天

片づける。裏庭では、婢が駈けて來て、洗濯物を取入れた。

やがて食卓から立つて妻子が下りて來た頃は、北天の一隅に埋伏して居た彼の濃い紺靨色の雲が、忽ちにむらくくと湧起つて、何の艶もない濁つた煙色に成り、見るく、天穹を這上り、大軍の散開する様に、東に、西に、天心に、ずんくと擴つて來た。

三人は芝生に立つて、驚嘆の眼を睜つて、この夥しい雨雲の活動を見た。

あな夥しの雲の勢や、黙示録に「天は卷物を卷くが如く去行く。」と歌うたも無理はない。青空は今南の一

(一)ヨ、本  
基、翰、默、示、録、の  
新、約、聖、書、中、の、一、篇、の、

ひた押し

眞夏の喘

冥府

軸にまき**蹙**められ、煤煙の色をした雲の大軍は、其の青空をすら餘さじものと、南を指して**ひた押し**に押し寄せて居る。つい今しがたまで雨を戀しがつて居た乾き切つた**眞夏の喘**は、何處へ行つたか、唯十分か十五分の中に、大地は恐ろしい雨雲の下に閉込められて、冷たい**黯い冥府**になつた。

雲の運動は、秒一秒劇しくなつた。南を指して流るる雲、渦まき雲、**眞黒**に屯つて動かぬ雲、雲の中から生るゝ雲、雲を摩つて移り行く雲、濃くなり淡くなり、淡くなり濃くなり、北から東へ、東から西へ、北から西へ、西から南へ、逆流して南から東へ、世界中の煙をこゝ

蹙  
足

天の半壁を照す

に集めて、煤煙の限りなく湧くやうに、眼を驚かす雲の大行軍の音響を聞かぬが不思議である。

冷たい風がすうつすうつと顔に當る。後馳せに雷がそろそろ、鳴り出した。北の方で、條をなさぬ紅や紫の電光は、時にぱつくと**天の半壁**を照して閃く。近づく雷雨を感じつつ、我等は猶頭上の雲から眼を離し得なかつた。薄汚い煤煙色をした満天の雲は、益、南へ流れた、水のように、霧のように、煙のように。空は皆動いて居る。潤い空ほどの一寸四方として、動いて居ないの**はない**。草木も人も息を屏めたかの様に、一切の物音ははたと絶えた。

空はとう／＼雲をかぶつて了つた。著しく水氣を  
含んだ北風が、ぱつ／＼と顔を撲つて來た。やがて粒  
だつた雨になる。雷も頭上近くなつた。母屋の南面の  
雨戸だけ残して、悉く戸をしめた。暗いのでランプを  
つけた。

ざあつと降出した。雷が鳴る。一庭の雨脚を凄じく  
見せて、ピカリと電が光る。颯颯と烈しく降出した。  
見る／＼庭は水になる。雨が飛石をうつて匆ねか  
へる。目に入る限りの青葉が、一葉々々に雨を浴びて、  
嬉しさうにぞく／＼身を震はして居る。  
「あゝ、好いおしめりだ」と誰かがいふ。

花散らす風の音は誰  
か知る。我は教へ行  
きて他へみん。

夜すがら

—みゝすのたはこと—

二一 海洋の月明

山崎米三郎

満天満海、唯紅蓮の焰をなせる入日の影も已に跡  
なく、天地溟濛の間點々數星を仰ぎ、一千の玃貅一日  
の苦熱より始めて蘇りたるを覺ゆる時、白き光朧に  
東天に起り、さながら夜の明けそめんとするにも似  
たり。

白き光は愈、光を加へて、やがて燦然たる半圓形の

紅蓮の焰  
天地溟濛  
玃貅

銀塊となりて、波上に現れそめぬ。銀滴忽ち水に落ちて銀波となり、白銀の光は一波より一波に移り、見る見る波上を疾走して、我が艦側に向つて馳來る。

淨々明々

百鍊の明鏡

忽ちにして一面の銀盤は、龍神下より之を擎げ、天女上より之を支へて、全く水天の界を離れ、淨々昭々、百鍊の明鏡を開きたる如く、朦朧たる天空に清光忽ち漲りて星辰光を失ひ、煌々たる銀色は千波萬波に湧きて、滿目濶然、涼風更に涼を加へて、爽快極りなし。吾人は此の急速なる眼界の變轉に接して、僅々半時の前夕照の壯觀に驚嘆の聲を放ちたるを顧れば、彼の落日が逸早く水平線の下を西より東に廻りて、

水天杳渺

清輝千里に  
亘りて銀波  
萬頃に流る

そが紅金の衣を白銀の服と更へて、茲に再び其の靈容を現し來れるに非ざるかと疑ひ、暫くは自然の壯觀に茫然たらざるを得ざりき。

かくて月は晴空を貫いて一尺を上れば、艦は銀波を蹴つて一漕を進み、水天杳渺の間、月と艦と互に活動を競ふが如く、形に影の伴ふが如く、浩々たる空中の孤月輪と、漫々たる波上の一浮城とは、絶妙の對照を爲し、吾人をして益壯大の感に打たれしむ。

初更の頃再び艦上に出づれば、月は已に高く半天にあり、清輝千里に亘りて銀波萬頃に流れ、皎潔浩蕩の感更に深きを覺ゆ。乃ち身を臥榻に横たへ、萬斛の

涼味を掬しつゝ、大空を仰げば、心氣曠然、宇宙の壯觀を獨占したる思あり。仰臥久しくして爽涼骨を洗ひ、夜色沈々、艦上聲無く、立つて艦室に下らんとすれば、月の雫か、桂の露か、衣袂の悉く沾ふを見る。

三更の頃三度艦上に出づれば、月色水の如く天心に懸りて、冷涼已に夏去り秋の到れるかと訝しむ。此の時波濤稍高まりて艦體軽く動搖し、艦の中央線に立つて月に對すれば、檣頭は或は月の右に在り、或は左に在り。暫く恍惚として眺むる中、いつしか我が艦の動搖を忘れ、檣頭の左右に動くを見ずして、唯月の檣の右に走り左に馳するを見るのみ。玉兔鞦韆に乗

Tennis Court.

りて戯るゝかと恠しまれ、天つ少女が天上のテニスコートに、月球を弄するかと疑はる。

去來す

五更の頃四度艦上に出づれば、月已に傾きて斷雲頻に去來し、雲は月を停めんとして抱くが如き貌を示し、月は雲より脱せんとして奔るが如き狀を爲す。忽ちに満月皓々、忽ちに天海濛々。或は半海輝きて半海暗く、匆忙變轉の狀これ洋上月夜の壯觀なり。

—軍艦旗の下にて—

二二 我が南洋

山崎直方

小笠原島二見港の灣頭に一基の石碑がある。同島

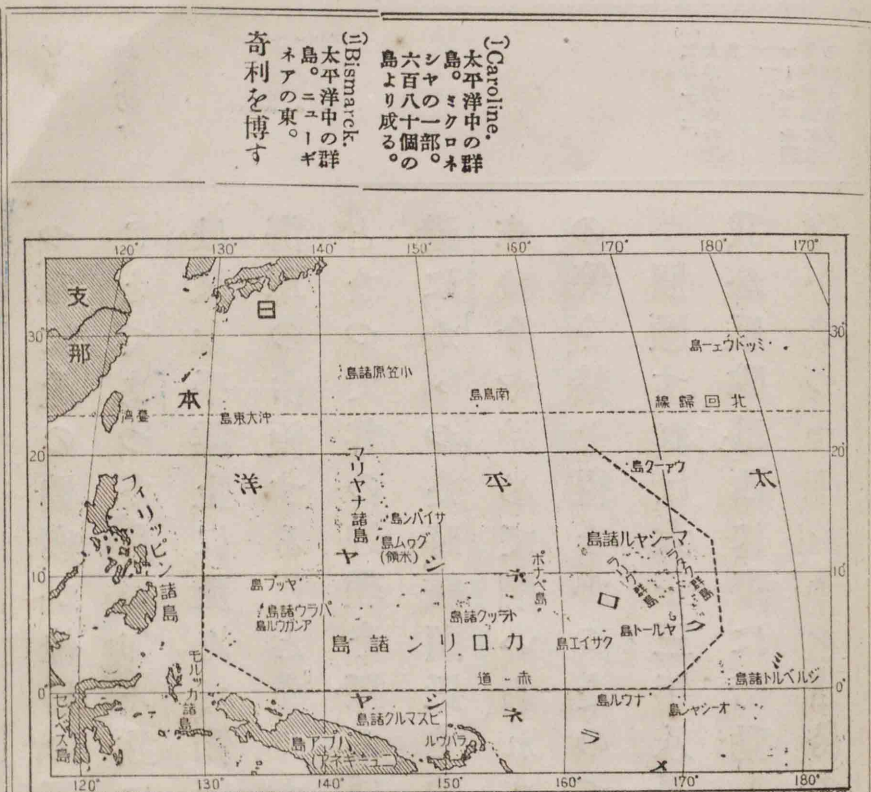
開拓

蜿蜒起伏

官遊

呼應

開拓の碑で明治十年の建立。其の碑文は實に時の内務卿大久保利通の撰に係る。文の中に「甲斐伊豆之山蜿蜒起伏至此□□乃我南門也」の句がある。此の闕文は初は「而盡」とあつたが、嘗て志士某が此の地に官遊した時、これを見て不祥の言であるといつて、直ちに鐵槌を揮つて此の二字を碎破し去つたのである。槌痕斑々鮮な裡に、今尙臙げに其の二字を髣髴するところが出来る。もとより伊豆の山脉が此に盡きず、遙かに南洋の諸島と相呼應してゐることは、争ふべからざる自然の地形であるが、而も彼のこれを碎破した意志は、寧ろ其の句が帝國の南進を呪ふが如くに見



(Caroline) 太平洋中の群島。ミクロネシアの一部の六百八十個の島より成る。

(Bismarck) 太平洋中の群島。ニューギニアの東。

奇利を博す

えたのを憤慨した爲であつた。予は先年此の碑に對して、之が一場の悪戯でないことを諒したと共に、當時歸航の途すがら、その頃既に南洋カロリン、ビスマルク諸島と交通して奇利を博し來つた商人等と同船して、其の探檢談を聴き、深く其の意氣に感じつ

好識  
烏兔勿々

つ、私に此の槌痕が他日の好識たらんことを祈つた  
ことであつた。烏兔勿々茲に十餘年、全歐戰雲の餘波  
は又太平洋上に及んで、獨領諸島の或者は既に我が  
海軍の占領する所となつた。而して予も亦南征の客  
となつて其の地理を探るに當り、會我が乗船の此の  
港にかゝつた時、舷頭近く碑のある所を望んで、彼の  
志の今や始めて酬いられたことを懷つて、轉た會心  
の笑を禁じ得なかつたのである。

回顧すれば大正三年八月、日獨の國交破れて以來、  
我が艦隊は西に東に活動し、九、十月の交、第一南遣枝  
隊がまづマーシャル諸島のヤルト島を占領した

〔Marshall〕  
大洋洲中の諸島。  
〔Jaluit〕  
マーシャル諸島中南部に在る細長き島。

〔Jap.〕  
カロリンの西部にある島。  
〔Mariana〕  
小笠原島の東南太平洋上の諸島。

劃然

のを手はじめに、十月七日には第二南遣枝隊がヤッ  
カ島を占領し、引續いて東西カロリン諸島、マリアナ  
諸島を占領し終つたのである。而して我が艦隊と同  
時に行動を起した英國の濠洲艦隊は、他の獨領諸島  
を逐次占領し、恰も赤道を境界として、日英兩國が獨  
領太平洋諸島を劃然南北に二分した形になつた。

かくて今日我が統治に歸してゐる地方は、マーシ  
ヤル諸島、マリアナ諸島(合衆國領グアム島を除く)、東  
カロリン諸島と、西カロリン諸島である。此等の諸島  
は、その總稱のミクロネシア(微小)といふ名に背かず、  
眞に微細な幾つかの島群である。其の最も大きいと

〔Guam〕  
一八九八年北米合衆國領となる。

〔Micronesia〕



①Ponape.

いはれるポナペですら、隱岐の島位の大ききさであつて、七百有餘の島嶼、岩石、其の全體の面積を合せて漸く百七十方里、即ち沖繩諸島に小笠原島、それに澎湖島を加へた位で、縣にすれば、まづ神奈川縣か佐賀縣より少し大きい位である。而もそれが北緯二十度附近から、南の方赤道に至るまでの間、熱帶圈の中に亘つて、南北一千二百哩、東西二千五百哩の廣大な水面を蔽うて、綺羅星の如く撒散らされて居り、其の水面の廣さは、畧濠洲大陸全土と匹敵せんばかりである。されば、小笠原島の二見港より汽船に乗つて、一時間僅かに十哩の經濟速度を以て南に進むとせば、一

綺羅星の如く  
匹敵す

經濟速度

②Ultras.

中樞地  
③Truck.

④Rabaul.

⑤Brisbane.  
濠洲大陸の東岸。

⑥Palau.

⑦Malakal.

⑧Philippine.

晝夜半で既にマリアナ島の最北に聳ゆる火山島ウラカスの圓錐峰を、水平線上に望むのである。更に進んで我が占領地域の中樞地點たるトラック島を發し、同一の速度を以て南すれば、三晝夜でニューギネアの獨逸總督府所在地であつたラバウルに到達すべく、猶往くこと六日で既に濠洲大陸のブリスベン港に入るのである。若しそれ西カロリン諸島パラウ群島にある形勝の錨地マラカル港より西へ向へば、フィリピン群島の東岸は、二十哩の巡洋艦を以てして、僅かに一晝夜の行程に過ぎないのである。翻つて東方マリアナ諸島の方面を見るに、その島

Gilbert.  
①Ellice.  
②Polynesia.

竿頭一步を  
進む  
指を染む

蕞爾

一子能く全  
局を制す

列は東南に蜿蜒して、指顧の間に英領(一)ジルベルト列島を起し、島脉更に延びてエリス列島となり、ポリネシア方面に渡る飛石となつて居る。我が有爲の企業家は、既に竿頭一步を進めて、ジルベルト島に渡り、椰子貿易に指を染めて居るものすらある。

觀じ來れば、我が占領諸島の位置の無意味でないことが察せられるであらう。蕞爾たる幾十の島嶼は、宛ら碁盤の面に布かれた碁石のやうなものである。これを巧に活用すれば、一子能く全局を制することが出来る。政治的發展、經濟上の活動、其の他各種の行動に利便を與ふることが決して尠くないのである。

況や此等島嶼其のものに於ける自然の資は、既に相當に豊富であり、而も猶開發の餘地があると思はれてゐるのである。

—我が南洋—

### 二三 珊瑚礁

山崎直方

指をに屈す

南洋の自然界に於て最も興味あるものとして、何よりも指を珊瑚礁に屈せねばなるまい。珊瑚礁は熱帯海洋、殊に太平洋の特色であつて、我が占領諸島の如き、其の陸島たると火山島たるとを問はず、其の種類に富み、殊に大部分は島其のものが全體珊瑚礁から出來てゐて、洋中に孤立してゐる。珊瑚礁の存在

は、既に我が領土中小笠原島、琉球諸島、臺灣等の沿岸地方に認め得られるが、其の規模、其の光景、固より南洋諸島のそれと比べることは出来ぬ。由來珊瑚は極めて清澄な海水を好むもので、南洋の海水の透徹せることは、碇泊した艦船が水中を透して、船底の龍骨までありくと見ることが出来る程である。波靜かな礁瑚の稍淺い所で、視眼鏡を用ひて、清く温い海底を窺ふ時、珊瑚の林は實に筆紙に盡し難い美觀を呈してゐるのに驚かされる。

珊瑚の中には樹枝状のものが多し。その蟠屈した根株を張り、槎枒たる枝を交へた有様は、實に千姿萬

蟠屈す  
槎枒  
千姿萬態

態であつて、多くは白色の中に、或は鮮な淡紅色、或は美しい董青色を交へてゐる。珊瑚の枝々の間には、各種の藻類、殊に堅い石灰質の葉をもつた石灰藻も少くない。此等が互に茂り合ふ有様は、實に秋の野に八千草の咲亂れた趣がある。そして其の珊瑚の林の中には、大きな沙巖が數知れず横たはつてゐるかと思へば、又青綠紅紫、熱帯の色彩眩いばかりな大小の魚族が、其の間を縫つて泳いでゐる。パラウやマーシャルなどには、長さ三尺にも達する巨大な碑磔貝が横たはつてゐる。濱の眞砂の飽くまで白いのには、何れも珊瑚の碎けて出來たものであるが、其の中には、又海

Angaur. 大洋洲西北部の島。

水中に浮游する微細動物の抜殻も少からず混つてゐる。燐礦の産を以て名高いアンガウル島の海岸に打上げられてゐる砂の如き、殆ど全部が罌粟粒大の有孔蟲の抜殻であつたのには、實に驚奇の感に打たれた。

珊瑚島は常に蒼々たる椰子の森を戴いてゐる。初に栽培したのもあるが、多くは自然生である。元來椰子の實は厚い纖維質の果皮を被つてゐるから、能く海流に泛んで遠く漂流することが出来る。偶、岩に當つても、容易に毀損することがない。それが流れ流れた末、珊瑚島に打上げられると、始めて根を下して

自然の配劑

Magellan. 葡萄牙人。航海者。西暦一五一二。

八重の潮路

生長する。自然の配劑は、誠に斯の如く巧である。珊瑚島は極めて低い島であるから、椰子の森の方が島其のものの海拔よりも高いものが多い。されば珊瑚島の島影が海客の眼に入るのは、餘程近距離へ來てのこととて、十哩も離れると、最早其の影を見失ふことがある。有名な世界的航海者マジエランが始めて太平洋を横斷した時、南太平洋のパウモツ諸島の一珊瑚島からマリアナ諸島に來るまで、幾千哩の八重の潮路に、途中幾百とない珊瑚島の隻影をだに認めず、過ぎたのも、その爲である。沖合から珊瑚島に近づくと、時始めて眼に入るのは、水平線上一抹の蒼い線であ

持て 二三 持て

點綴す

る。更に近づくと、其の蒼い一文字の下に白い線を見る。いふまでもない、蒼い線は椰子の森で、白い線は水際に打上げられた珊瑚の砂礫と、そこに寄せては返し返しては寄せる磯波である。此の細く平たい珊瑚島が、或は長く或は短く水平線上に點綴された状は、恰も品川沖の臺場を遠望するやうであると或人は言つた。

我が南洋

二四 信天翁を釣る

信天翁の雄

ばたくと甲板を驅る靴の音がしたと思つたら、釣つたよ、信天翁を釣つたよ。」といふ聲がけた、まし

附和雷同

一期の名折

く甲板に響く。好奇と附和雷同とて人後に落ちるのを一期の名折と心得て居る輩が、「どれく」と大喜で

飛出して来る。



信天翁

世の中に「魚を釣る」といふ言葉はあるが、「鳥を釣る」といふ事はどうも餘り聞いた事がない。此の未見、未聞の新事實を、眼前二百ヤードの海上に珍しくいふかしく眺

棒に振る

め渡した時、これは奇妙だと恐悦せざるを得ない。小さな扇形の板の上に、釣針と餌とが設けられる。これぞ信天翁がその一生を棒に振る誘惑物である。

Curtis,  
米人カーチス  
の創製。  
納り返る  
死生を度外  
にす  
別乾坤

此の釣針にかゝつた信天翁が、今釣絲が手繰られるまゝに引寄せられて居る。然るに、こゝに不思議なのは信天翁の態度である。些の苦痛も、煩悶も、恐怖も感知しないやうに、すら／＼と水の上を走つて来る。羽翼を少しく擴げ、頸を伸し、前に突出した二つの蹠で軽く水を蹴つて、きよと／＼とやつて来る所は、何の事はない、ちやうどカーチス式水上飛行機の滑走振である。かく釣られ、かく引寄せられ、かくふるまふのが我が使命であり、我が本領であると言はんばかりに、納り返つて居る。その迫らず騒がず、悠揚と死生を度外にした別乾坤に逍遙して居るやうな態度が、ま

アセラヌ  
アセラヌ  
アセラヌ  
アセラヌ  
アセラヌ

背景

權化

づ氣に入つた。

七時に太陽が約束の如く沈み去つて、西の空には美しい雲の花が叢り咲き、夕暮の色がまだ碧瑠璃の西の海に漂はぬ時、此の莊嚴な天地間の大自然美を背景に、縦横無盡に、傍若無人に飛廻るわが信天翁は、雄大な海洋の景象美の象徴である、海洋に磅礴する海洋精氣の權化である。

凡そ二枚の羽翼と二本の足を具有する鳥といふ鳥の中で、最も淳にして最も朴なるものは、わが信天翁である。阿呆鳥と卑しめられ、馬鹿鳥と笑はるゝを知らぬ氣に、色彩の變化極りなき雲と海とを負う

茶化す

て、悠揚迫らず、汪洋たる大海の場面を飛ぶ信天翁は、何處まで世の中を茶化してゐるか、どこまで心が太いか分らぬ。

その扇形の尾翼を撓め、それで舵を取りながら、憎らしい程に落ちついた姿で、帆を掠め雲を劈いて、斜に身を落し、波濤の起伏に随つて、千變萬化の曲藝を演じながら飛來る様は、なかく、の見物である。若しカーチスが之を見たら、我が空中征服の理想は此の境地である。と絶叫するだらうと思はれる程に巧妙な飛方である。それを見ては、阿呆どころか、なかくの利口者である。

忌憚なく

その飛行界の覇者が、誤つて人間に捕へられ、甲板に放置せられた時の圖は、殊に彼の率直淡泊な天性を發揮したものである。伸ばせば丈に餘る大翼をもつた彼が、舞ひも出來ず、よたく、と不恰形（好）な歩きぶりのかはいらしい容姿は、率直にして偽らず、衒はざる性格を、忌憚なく表現して居る。わが與へられたる天賦（マッスル）に満足せる性格を表示して居る。水の上で滑走する外は、羽立ちの出來ないことから、阿呆鳥といふ有難からざる名稱を戴いた彼は、今やその周圍に、多くの殘酷なる嘲笑者が環視して居るとも知らず、時ときよとんと落着いた眼附をしたり、遠慮もなく糞

をしたり、小便を垂れたりする。すべての愛嬌の限りを盡す。世を茶化し、人を嘲る限りを盡す。かくして自覺しない滑稽が、この弱者によつて演ぜられる時、同情のない、智慧のある、利己的な人間は、面白い面白いと手を打つて笑つて居るのである。

「海のロマンス」に據る――

二五 曾呂利新左衛門

湯淺元禎

堺の鞆師むす、た、た始めて太閤に謁しける時、太閤「汝の姓名は何と申すぞ」と問ひけるに、其のものの對ふるやう、「臣が姓名は即ち曾呂利新左衛門と申候。太閤はて奇

なる姓もあるものかな。して其の曾呂利と申す姓には、何ぞいはれにてもあるか」と問はせけるに、又答ふるやう、聊かいはれもこれあり候。別にあらず、臣の拵へたる鞆は堅くして曾呂利と入り、敢へて問へず。こゝを以て曾呂利と申候。太閤「之は奇なり。又折節來るべし」といはる。

他日又太閤に謁しけるに、太閤問うて曰く、「汝の姓名は何と申せしを答へて曰く、曾呂利々々々、新左衛門新左衛門。太閤怪しみて其の重言かたことばを尋ねけるに、新左衛門の答ふるやう、殿下先に臣の姓名を問ひ、今又重ねて問ひ給ふ。故に臣も亦殿下重問の意に従ひ、同



じく重言を以て答へ候なり」と。

新左衛門或時太閤に對ひ、願はくは一日御耳の匂を嗅がせられたし」とありければ、太閤訝しく思ひ、「こやつ又何をかゝすらん」と疑ひしが、何はともあれ宜し、汝がよきに嗅げ」と許されしかば、諸大名の御機嫌伺に出づる時を窺ひ、太閤の耳元に口寄せて、何やら言ふ體なれば、皆々心中密かに驚き、かやつ何をいふらんか。若しや我を讒言するにはあらざるか。かやつは頗る殿下の寵愛する所なれば、かやつがいふこと御用ひあらんも測られず」と憂へ、おの／＼自邸に歸りて、早々數多の金銀財寶を調へて、密かに曾呂利が

高き  
封中  
向  
り  
お  
勢  
持

呆然

方へ贈りけるにぞ、數日にして金銀財寶山の如く集ひければ、太閤の御前に出で謝していへるやう、殿下のお耳を拜借し、其の香ばしき匂を嗅ぎたる功德によりて、金銀財寶山の如く集ひ來りて、殆ど坐するの餘席これなく候。これ全く殿下の御耳の効能なり」とありければ、太閤も亦呆然として愕きけるとぞん。又或日の事なりしが、新左衛門太閤の機嫌を取り、頗る其の功ありしかば、太閤、何なりと汝の望めるものを賜はせん」とありけるに、新左衛門のいへるやう、「臣敢へて大なる望もこれなく候。唯紙袋二箇程米を賜はりたし。太閤、そはいといと易き事なり。餘り慾ず

くなの至ならずや」と仰せありけるに、新左衛門、これにて澤山なり」と申して退、出せしが、やがて二箇の紙袋を張抜き、數十百人を雇ひ來り、太閤の御前に出て、「前日御約束の米これに賜はりたし」と。米倉二戸前を蓋ひたりけるにぞ、さすがの太閤もこれには呆れて、暫し言句もなかりけり。

又或時太閤數多金銀の蟹を造らせ、之を庭の泉水に放ちて娛樂としけるが、程經て見飽きたりとて、近習の者に、何ぞ一用をいひ出づる者に之を與へんと申されけるに、皆々大いに悦び、臣は之を紙押になさんといひ、或は臣は金の茶釜の蓋も持たねば、せめて

之を其の蓋の把手になさんといひ、何といひ、彼といひて一箇づつ賜はりしうち、新左衛門の乞ふやう、臣は人の相撲も既に見飽きし事なれば、此の蟹を集へて、相撲を致させんと存ずるなり」といひければ、太閤「相撲とありては、五箇や十箇にては興薄かるべし。悉く持行くべし」とて、残れる蟹を皆與へられけり。其の頓才實に驚くべく、奇とすべし。

—常山紀談—

二六 風と露 ———— 三好孝

一 風の音立見物の時云々云々フ。物の聲をいひ、ニオト云々。

草木が風を受けて、葉、枝又は莖を動かして一種の

音を發したり、又凧に木の葉が慌しく飛舞ふ様などは、いかにも面白い眺である。秋の野の芒の風に戦ぎ、河邊、湖邊、海邊などて、荻、蘆、菰などが風を受けてざわざわ音のする時などは、至つて寂しい感情が起る。

秋の夕方、晴渡つた空に一點の雲も無く、又さしたる空氣の動搖も無いのに、森や林の梢で何と無く音がして、秋風の渡るを知らせることがある。彼の松韻、松籟などいふのも之と同じわけで、別段に強い風も吹かぬのに、松の梢では一種の音がする。之はやがて空には多少の風のある事を示すのである。須磨、明石の海邊、又は東海道五十三次の松並木などて、晴れた

松韻  
松籟

凧

氣舞風梳新  
柳髮水消波  
洗菰昔髮  
郡長香

歌人。鹿兒島  
五年の明治六  
年七十六

日の夕方又は月の冴えた夜に、高い梢の上で松風の音のするのは、自ら一種の趣がある。昔から松風の音が吟詠の材料に上つたのも尤もである。

枝垂柳の風に靡く様を見ると、微風では多くの枝がそよ／＼と一緒<sup>(一)</sup>に動いて、風新柳の髮を梳るといふやうに、優詠な趣がある。然るに暴風になると、恰も狂ひ騒ぐ鬼女の髮のやうに、東に、西に、南に、北に舞狂ふ。亦一種の壯觀である。

竹藪の風を受ける工合も、多少これに似て居て、風に逆らはずに動く所に趣味がある。歌人八田知紀はかやうに歌つてゐる、

三葉蘭  
キの菊  
タケ竹  
ワタ梅

吹く風になびきくゝて争はぬ

こゝろや竹のみさをなるらん。

二 露の色

露は夏草に下りるもので、朝早く起きて叢の間を見るとき、葉に綺麗に着いて居る。殊に稻、蘆などのやうな禾本科の植物や、露、やぶかうじなどの葉の縁には、小さい水玉が規則正しくのつて居る。又竹の葉の先にも、同じやうに綺麗な露の玉が宿る。

斯様に稻や竹の葉の先、又は露、やぶかうじなどの葉の縁に着く水玉は、空氣中の水分が凝集したためは無く、植物體の中に澤山に溜つた水が、葉の縁又は

凝集

先にある小さい孔から夜中外へ濾しだされて出來たのである。植物の中から出る水は、何時でも葉の中のきまつた部分に着くが、さうで無くて、葉の全面に銀色の小さい水玉が不規則に着いて居るのは、空氣中の水分から出來た眞の露である。

露に逢ふと、草が如何にも涼しさうに、且新鮮に見える。熱帯の沙漠のある地方では、雨は降らぬが、朝露が夥しく下りるから、植物がそれで水分を取ることが出来る。總べて露は夏の盛、晝間熱く、夜から明方にかけて熱度の急に下る時に多く出来るもので、日中の暑さに萎れかゝつた葉や莖も、再び蘇つたやうに

なる。露は斯様に植物の生存上に大切な關係があるばかりで無く、朝なく、清新の美觀を夏草の上に與へるものである。

—植物生態美觀—

### 二七 富士の大觀

大町 桂月

旅順にて黄金山を攀ぢし時の事なり。旅順要港部の司令官黒井海軍中將我を導く。將軍善く談ず。話柄西歐の天に飛ぶ。伊太利にてベスビオ山に登りし時、一獨人路伴となる。突然、君は幾度富士山に登りしか。と問ふに、「一度登らぬも馬鹿、二度登るも馬鹿」と答ふれば、「富士山の如き立派なる山は、世界に二つとなし。

話柄

(一)名は悌次郎。

(Vesuvio.)  
(Vesuvius.)

路伴

余は四回登れり。日本に生れながら、唯一度しか登らぬとは、さてく、勿體なきことなり。と笑はれたり。とて笑ひぬ。余も知らず識らず笑ひぬ。

Hercules.

高さをいはば、ニューギニアのヘルキュールス山

の如きは、三萬二千七百八十呎、幾ど我が富士山に三

倍す。されど正しき圓錐形を成し、偉大にして秀靈を

極むること、世界中富士に比すべきものなし。妙高、戸

隠、立科、八ヶ嶽、箱根、天城など所謂富士火山帶の盟主

なると共に、日本山嶽の盟主にして、ほゞ日本の中央

部に位せるが、山又山の奥に隠れず、東海に接して、周

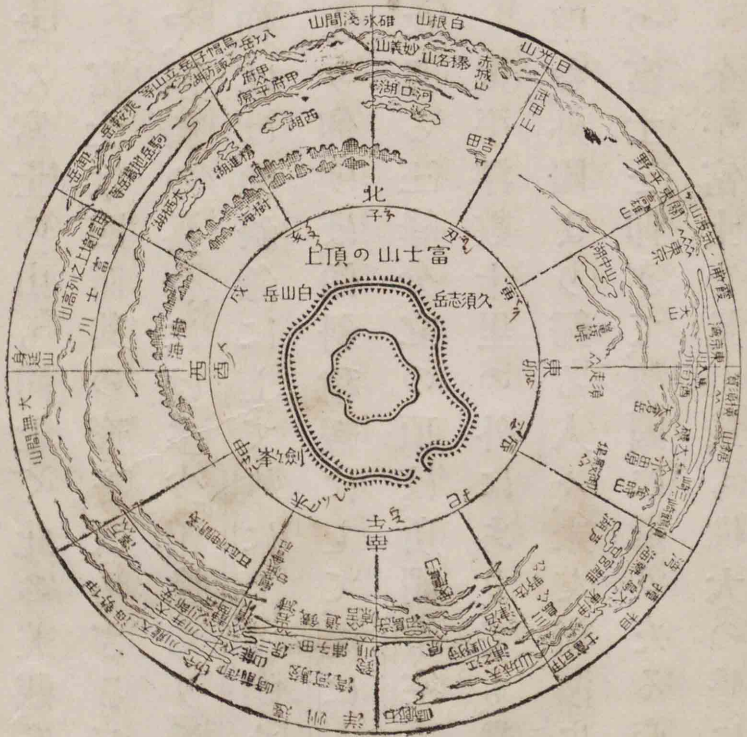
圍に裾野を控へ、四面其の形を改めず、近く之を一周

盟主

(二)越後國。  
(三)信濃國。  
(四)相模國。  
(五)伊豆國。

するを得べく、展望二十一國の多きに達す。十三州一  
 目とは、在來言古されたる所なるが、これ其の實を失  
 へり。十三州とは相模、武藏、安房、上總、下總、上野、下野、常  
 陸の關八州の外に、伊豆、駿河、甲斐、遠江、信濃を加へた  
 るものなるべきが、尙越後の妙高山、越中の立山、美濃  
 の惠那山、伊勢の朝熊山、尾張の小富士、三河の石卷山、  
 信濃、飛驒に跨れる御嶽、常陸、磐城に跨れる八溝山よ  
 り富士を望むを得べければ、富士より二十一國を見  
 下し、二十一國より富士を仰ぐなり。日本中の佳景と  
 いへば、富士の見ゆる處なり。他の條件は具備せりと  
 も、富士見えざれば、何となく物足らぬ心地せらる。

玲瓏



れば眞白にぞ富士の高根に雪は降りける。も同じく

富士山は夏を

除きては、雪を被  
 りて、白玲瓏たり。  
 夏とても、山上に  
 は雪の消えざる  
 處あり。雪は一層  
 富士を美にし、兼  
 ねて神聖にす。山  
 部赤人の田子の  
 浦ゆ打出てて見

繪空事

此の美觀を捉へたるなり。宗鑑の「元朝の見るものに  
 せん富士の山も同じく此の美觀を捉へたるなり。  
 富士は四面其の形を改めざるが、頂上の峰の具合  
 や、傾斜の具合には多少相違あり。近く甲州方面より  
 仰げば、傾斜急にして、雄にして峭なり。近く駿州方面  
 より仰げば、傾斜稍緩にして、温にして秀なり。よく繪  
 に見る三峰分立の頂は、所謂繪空事に非ず。  
 太平洋數十里の外にありても、幾ど富士の全幅を  
 望む。外國より歸る人々、未だ横濱に入港せざるも、ま  
 づ富士を仰ぎて、故國に還りたる心地すべし。  
 余が富士を見て最も偉大の感に打たれしは、遠く

〔實語敬の句。〕  
 〔頼山陽耶馬溪  
 圖卷記の句。〕

超脱す

〔徳川時代の歌  
 人。桂園と號  
 す。天保十四  
 年。二五〇三  
 殘。年七十六。〕

にては、大島の三原山上より見たる時なり。近くにて  
 は十二ヶ嶽より西、河口二湖を隔て、見たる時なり。  
 〔山は必ずしも高きを尙ばず、樹あるを尙ぶ。〕といひ、  
 又山にして水を得ずんば生動せず。といへるが、これ  
 普通の山のことなり。一萬二千五百尺の富士山とな  
 れば、樹に超脱し、水にも超脱す。高い哉富士の山、全山  
 を十合に分つ。麓の一合が既に附近の群峰の上にあ  
 り。香川景樹の「群山の高嶺々々を傳ひ來て富士の麓  
 にかゝる白雲はげに實況なり。脚底に雲を見、雷を聞  
 きつ、攀ぢ行けば、下界を離れて天に登る心地す。  
 頂上よりは、近く伊豆、相模、駿河、甲斐、信濃などの山

文はカンカウシ  
詩は李白ナリ。

(一)支那唐代の大詩人。  
(二)徳川時代初期の國學者。大和の人。貞享三年(一七二五)歿。六十四。

山を見下し、駿河灣を見下し、相模灘を見下し、遠州灘を見下し、上總、下總の彼方の太平洋を見下す。太陽の直ちに海より出づるを見る。殊に下界を蔽ひ盡せる雲の海の果より、太陽の昇るを見れば、何人か神聖の感に打たれざらん。氣澄みて月近し。手を伸ばさば届かんかと思はる。李白が「不敢高声語、恐驚天上人」の心地も起るべく、下河邊長流の「富士の嶺に上りて見れば、天地はまだ幾程も分れざりけり」の心地も起るべし。

普通一般に、日本國民が神聖の感に打たるゝは、二重橋外より皇居を拜する時なるべし。若しくは水清

(一)水戸の志士。安政二年(一八二五)歿。五十五。

き五十鈴川の彼方、鬱蒼たる神路山の前に、大神宮を拜するの時なるべし。之を自然界に求むれば、白玲瓏の富士を仰ぐの時なるべし。萬世一系の天皇は人にして神におはす。神の知らず日本は神州なり。藤田東湖は神州の正氣を歌ひて、秀爲富士嶽といへり。日本に山は多けれども、神州にふさはしき山は、富士の外に求むべからず。東海に特立して、白玲瓏たる姿は、けに神州の山なり。神の山なり。本居宣長の「敷島の大和心を人間は、朝日に匂ふ山櫻花」を一轉して、「敷島の大和心を人間は、朝日にはゆる富士の白雪」といひても、日本人に不同意はなかるべし。富士山は秀靈を



傾倒す  
默契

足利時代の末の  
武將。文明十  
六年。二一四  
十五。歿。年五

三日月  
雲りて七  
えのなほは  
富士の山

り。正大なり。清淨なり。凜として氣高き趣あると共に、  
温にして親しむべき趣もありて、神州の氣象を代表  
す。大和魂地に凝つて富士山富士山となれるか、富士山人に  
凝つて大和魂大和魂となれるか。世界觀光の客なほ富士に  
傾倒す。神州の國民は、何人も富士と默契ある筈なり。  
野を行きても、山に入りても、海に浮びても、富士を  
見れば何となくゆかしくて、一種の神に接する心地  
す。太田道灌は、我が庵は松原つゞき海近く富士の高  
嶺を軒端にぞ見る。と歌ひたるが、何はさて置き、富士  
を窓に入る、家こそ、日本人の理想の住居なれ。煤煙  
立昇る煙突の間にも、富士だに見ゆれば、工業地も詩

旁午す  
市塵

山中、河口、  
四、精進、本

の國となる。電車自動車旁午して、電線空に蜘蛛の巢  
を張れる市塵市塵の中にも、富士だに見ゆれば都會も繪  
の國となる。鳥居鳥居の上に富士見えて、祠は愈愈靈靈に、尾花  
の末に富士見えて、野は益益なつかし。富士の高趣は、古  
來描いて描く能はず、歌うて歌ふ能はず。富士唯黙々  
として、大空に自然の繪を展べ、自然の詩歌を綴る。  
世には眺めてよき山あり。登りてよき山あり。富士  
や眺めてもよく、登りてもよし。山を見下し、野を見下  
し、近く五湖五湖を見下し、遠く太平洋を見下す。雲と路を  
争ひて登り、渴して千秋の雪を掬す。頭上に明月を戴  
きながら、脚底に雷鳴を聞く。飛鳥は唯背を見る。動物

後道  
の  
い。

形か見  
承平三年  
五十七  
平安朝の歌  
人。世に堤中  
納言といふ。  
承平三年(一  
五十七)卒。年  
五十七。

も追隨する能はず。天風蓬々として、何處ともなく仙樂を奏す。  
— 富士行 —

二八 人の親

親子

藤原兼輔<sup>(一)</sup>

ひとの親の心は闇にあらねども  
子を思ふ道に惑ひぬるかな

大江千里<sup>(二)</sup>

秋の日は山の端近し暮れぬ間に

は、にみえなん歩め我が駒  
夫婦  
伊藤仁齋<sup>(三)</sup>

(三) 徳川時代の大家。寶永二年(一三六五)歿。年九十九。

(二) 平安朝の歌人。醍醐天皇の朝に仕ふ。

(一) 平安朝の歌人。村上天皇の朝に仕ふ。

緑子を見れば涙のかずそひて

ありしむかしぞいとど戀しき  
兄弟  
松平定信

埋火のあたりのどかにはらからの

まどゐせし夜ぞ戀しかりける  
朋友  
平兼盛<sup>(一)</sup>

世の中に嬉しきものは思ふどち

はな見てくらす心なりけり  
讀人しらず

思ふどちまどゐせる夜は唐錦

た、まく惜しきものにぞありける

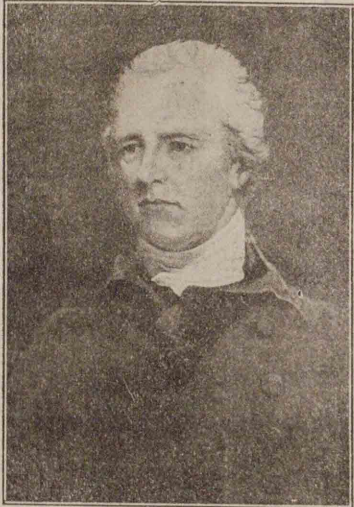
二九 少ピット

西曆一千七百五十九年五月、天は英國の爲に、將來  
 其の國を雙肩に擔つて起ち、國歩の艱難を救ふべき  
 不世出の英才を（イ）下した。ウイリヤム・ピットは即ち其  
 の人である。彼は當時の長老政治家として畏敬せら  
 れた老ピットの第二子で、父に對して、少ピ（イ）ットと呼  
 ばれてゐる。（イ）才子多病（智慧の多きは病氣が多い）  
 少ピットは幼時から身體が弱かつたが、其の才智  
 は非常に發達して、夙に神童を以て許されてゐた。尋

雙肩に擔つて起つ  
 國歩艱難  
 不世出の英才  
 William Pitt  
 通稱チャタム伯 Earl of Chatham  
 西曆一七〇八

神童

此の形を  
 此の心  
 此の才



少ピット

常の小兒の様に、戶外で遊戯するのを好まないで、常  
 に讀書に親しみ、之を何よりの快樂とし、熱心をウイ  
 リヤム。又は、少年哲學者の（イ）綽名を得た。單に記憶力の  
 優秀であつたのみで無  
 く、其の思慮、判斷も、少年  
 時代から老熟してゐた。  
 老ピットが功勞に依つ  
 て伯爵を授けられた時、  
 僅かに七歳の少ピットは母に向つて、私は次男に生  
 れたのが喜ばしい。父上のなさつた様に、花々しく下  
 院で働くことが出来るから、といつたといふ。貴族の

Cambridge. 英國の有名な大學。英京倫敦市の東北四十八哩にあり。舌を捲かしむ

永眠

時局

いち早く

長男は其の家を繼ぐので、下院の議員たる資格を得られないからである。  
ピットは十五歳でケンブリッジ大學に入學したが、其の學才は忽ちにして同輩を凌ぎ、學長をして舌を捲かしめた。加之其の起居の端嚴なことは、他の學生の模範であつた。

老ピットの永眠は少ピットが十九歳の時であつた。父が時局の困難な問題の爲に、重い病の床から出て、議場の演壇に立ち、最後の大演説を試みた時、少ピットの若い眸は、熱心と敬愛とに輝いた。演じ終つて父が卒倒した時、いち早く駆け付けて介抱したのは少

ピットであつた。父は再び起たなかつたが、其の精神は其の子に傳はつて、更に偉大な力を發揮した。子は父の偉業を繼ぐことを生涯の目的とし、父は我が子の自分よりも有爲なるべきを知つた。

父の歿後、ピットは益々精勵して、學才を磨き、辯舌を練り、早くも二十一歳の時、議員の總選舉に選ばれて下院の一議席を占めた。かくて始めて壇上に立つて處女演説を試みた時、滿場の人は此の少壯議員に好奇の視線を注いだ。其のあざやかな論旨、きつぱりとした態度、銀鈴を振る様な美聲に、一同酔へるが如く、感歎の聲は堂を揺がすばかりであつた。

處女演説  
好奇の視線  
を注ぐ

聲望

ピットの聲望は日を経るに随つて高まり、一千七百八十二年には推されて内閣の一員に列し、越えて八十三年十一月には遂に内閣總理大臣となつた。時に年二十四歳餘りの青年であるから、國民中には輕侮と危懼との念を以て此の内閣を迎へたものもあつたが、己を信ずることの飽まで篤いピットの才力と愛國心とは、快刀亂麻を斷つ勢を以て、當時の紛亂を解決し、漸く國民の信望を得、十七年の久しき其の内閣を持續した。二十四歳の壯齡で首相となり、よく國家の危殆を救つた此の人に比肩し得べきもの、古來各國の政治家中、果して幾人あるであらうか。

危懼

快刀亂麻を斷つ

信望

山縣監印  
（和）

國利民福

折衝

全歐洲を席卷す

一指を染む

畫策

ピットは一方には内政に意を用ひ、實業を振興し、財政を整理し、交通を改修して、國利民福を進めると共に、他方には外國との巧妙な折衝によつて、大英國の地歩をして確實鞏固ならしめることが出來た。殊に晩年に於て苦慮したのは、佛帝ナポレオン一世との對抗であつた。當時ナポレオンは殆ど全歐洲を席卷した勢を以て、英國をうかぶつたが、ナポレオンの雄圖を以てして、尙英國の本土に一指を染め得ず、遂に怨を吞んで没落の悲運に陥つたのは、ピットが病弱の一身を以て國難に當り、内に國民の愛國心を鼓舞し、外に名將勇卒を送り、畫策大いに努めた偉功に

ミハロ一カツテスル。  
識一見デ物を見わける。

(1) Trafalgar. 西の海角。西南端は此の沖にて五年はる。  
(2) Waterloo. 今の白耳義の村落。戰は西曆一八一五年の年。

勇猛心

歸せねばならぬ。トラファルガルの海戦に佛國の大艦隊を全滅させたネルソン提督も、ウォーターローの陸戦にナポレオンの死命を制したウェリントン將軍も、其の初は實にピットの人を見る明識によつて推舉せられた人々であつた。

生來虚弱なピットは、不斷の勇猛心を以て多年國事に奮闘したが、一千八百六年、四十六歳を以て其の光榮ある一生を終つた。當時ナポレオンの勢力は尙盛であつて、聯合軍の敗報は頻々として來た。ピットは重病の床上、其の報知を得る毎に、深く國家の前途を憂へて、心を傷ましめた。今はの時にも、おゝ我が國

家よ」と一言の叫を漏したといふ。ピットは實に短命であつた。けれども其の愛國の至誠に燃立つた精神は、永く大英國の國民の心に生きてゐるのである。

三〇 人の香氣

竹越與三郎

昨日或席上にて、一場の談話を求められ候ひしまま、人の香といふ演題にて、花ならば梅たり、薔薇たり、蘭花たらんことを、人々に求め候ひき。今茲に青年諸君の爲に、更に此の趣旨を開陳致度候。

山野に花卉少からず候へども、香芬あるものは多からず候。しかも香芬あるものは、藪澤の中にと

花卉  
香芬  
藪澤

漫然

も、人のために認めらるべく候。これと同じく、人もまた香氣あるものとならんことこそ願はしく候へ。人の香氣とは、其の才智、藝能に伴ふところの精神を申すにて、何事を爲すにも漫然として爲さず、利己的に爲さず、一種の精神によりて爲すことを意味致候。苟も此の精神あらんか、其の事業の大小を問はず、必ず生命あり、色彩ありて、人を動かし、人を感ぜしめ、人に認めらるべく候。

自敬

さて人の香氣は何より來るかと申候に、自敬の念より來ることを忘るべからず候。自敬とは自ら尊大に構ふる譯にてはこれなく、自己が自己に對し敬意

も於てアリ、  
復の中ニ  
自敬の先要

此の身惜しむべし

眇たる

君子は獨行影に耻ぢず  
君子は惡木の蔭に宿らす

(Alexander the Great) (四層紀元前三五六―同三二三)  
(二)藤原資朝の子。父の佐渡山城入道に本殺す。三郎を復して仇を殺す。

を表すことに候。此の身惜しむべしと思ふ一念に候。眇たる此の身も天地の精靈を宿したる一塊なれば、大いに發しなば如何なる働を爲さんも知るべからず候。然るに目前の劣等なる慾情に追はれて、尊からぬ所業を爲さんは耻づかしき限りに候。君子は獨行影に耻ぢずと申すも、君子は惡木の蔭に宿らすと申すも皆同じ意義にて、己を敬ふ念より出でし語に候。昔アレクサンドル大王に對して、敵軍に夜討をかけんとして申出でし者ありし時、大王これを却けて、朕は勝利を盗まざと申され候ひき。又日野阿新丸が父の仇を討ちし時、まづ其の枕を蹴て目を醒さしめて後、

投機

これを討ち候ひき。古今戦勝の將軍、復仇の子少からざる中に、是等の人のみ多く語り傳へらるゝは何故なるかといふに、其の所業に精神あり、香氣あるが爲に外ならず候。近來我は如何にして富を作りしか。といふ如き俗惡成功談の傳へらるゝが爲、世の青年を誤ること少からず候。小生は、青年諸君が、一時體裁よく暮すといふやうなる投機談に迷はず、唯其の才智藝能によりて、精神あり、香氣ある生活を營まんことを希望致候。香氣ある人は、世間必ずこれを認むべく、一時の不遇は決して失意落膽するに及ばず候。以上は平凡の語には候へども、小生の平常家兒輩

に語りをるものに候へば、無難にして間違なき事だけは確信致候。小生は青年諸君が退いて右いふ香氣を養はれんことを偏に希望致候。

—讀書樓間話—

三一 學徒に示す

萩野由之

精深微妙の眞理を究むといふ高尚なる學問は言ふまでもなし、纔かに一技一藝の上手と言はれんだに、其の心を潜めず、放埒に明し暮しては、事の成らんことおぼつかなし。苟も師父の教を受け、先輩の講説を聞く時に當りては、その放心を収めんこと最も肝要なるべし。若し空を渡る鴻鵠トウカクに心を馳せ、門を過ぐ

放心



僻事

(一) 參河の人。永  
祿四年(二二  
二一)川中島  
に戦死す。年  
六十九。

る車馬に目を奪はれなば、心こゝにあらずして、視れども見えぬ、聴けども聞えざるべし。いかで學業の成るを望むべけん。何事も古人を學ぶといふは僻事こせうなるべけれど、その善きものは擇びて師とすべきにこそ。今、古人勉學の一端を擧げて、反省の助とせん。戰國の頃、山本勘助晴幸（一）とて、甲斐の武田の臣にて、軍略世にすぐれたる人ありき。嘗て衆人の中にて軍事の物語しけるに、その席に、小宮山助太郎、小山田八彌、秋山友市といふ三人の小兒ありしが、小宮山はうづくまりて謹聽し、八彌は笑語し、友市は度々座を立ちけり。勘助人に語りて曰く、助太郎は必ず事を濟す

(一) 近江の人。寶  
永二年(二三  
六五)歿。年八  
十二。

花の下

ものならん。二人は必ずく、用には立つまじきものなり。方々よくその行末を検せられよ。といひけり。後に武田氏衰へて、勝頼天目山に敗北せし時、果して二人は出奔し、助太郎は君の勘當蒙り居たりしかども、遂に殉死せり。世に小宮山内膳友信といふは、この助太郎が後の名なりとぞ。又天和の頃、北村季吟（一）は歌、連歌の上手にて、後に幕府に召出され、和學方となりて、新に家を興し、近代の文學家なり。この人はじめ花の下（一）の宗匠となり、精靈會の百韻しける席に、その子湖春、十四五歳ばかりなるが侍りけるに、つと立ちて廁に行かんとせり。季

高きミテヤセ長く

うつけ者

吟怒りて、やよ悴ウツク。汝連歌に身を入れて居垂れにした  
りと人に言はれんは、道に於て耻にあらずかゝる席  
にて中座せんとは、いみじきうつけ者ぞ。』といたく誠  
めけりといへり。

いづれも、その道に心を入れて他事をきこと、かく  
の如くならざれば、世に勝れたる堪能ナラシキにはなり難き  
を誠めたるなり。學徒苟も名を成さんと思はゞ、こゝ  
に深く思を致すべきものぞ。伊藤東涯先生が「道を學  
ぶものは、孤軍大敵に臨み、單身重圍に陥りたらんが  
如く、一尺を進むとも、一寸を退くことなかれ。」といは  
れしは、實に思慮ある言といふべし。

—國文—

思を致す

(一)京都の儒者。  
仁齋の長子。  
元文元年(二  
三九六)歿。二  
六十七。

精神的な生活  
物質的な生活

(Brussels)  
白耳義國の首  
府。

三二 鍵の國と障子の國 河上 肇

西洋人の精神的乃至物質的な生活を何かに纏めて、  
掌の上に載せて見せよと註文をされたならば、私は  
鍵を出して示さうと思ふ。始めてブリュッセルの素人  
下宿に入つた時、定められた自分の部屋を見廻して、  
私は鍵の多いのに驚いた。戸を開けて室に入ると、其  
の戸を内から閉ぢる爲に鍵がある。北側に窓がある、  
其の窓に亦鍵がある。一度是等の鍵を下したならば、  
誰も私の部屋にはいつて來られぬ事になつて居る。  
是等の鍵を見て、道理からいへば、私は安心すべき

であらうが、實際は寧ろ淡い不安と淺い危惧に襲はれた。戸棚がある。勿論戸に錠があり、抽斗に錠がある。洗面臺の下に、四段の抽斗がある。一々それに錠が拵へてある。机にも抽斗がある。それにも亦錠が拵へてある。凡そ開閉の出来るものに、特別の装置の無いものは全く無いのである。郵便を一つ入れに出る。歸る時には、必ず錠を出して錠を外さぬと、家の大戸は開かぬのである。夜になると、其の大戸に内から錠を下す。錠がなくて外からはどうせ開かぬ戸であるが、猶用心のために更に錠を下すのだと見える。錠が下りた後は、外から錠を入れて、一回半廻さぬと戸は開

要領を得ぬ

Hotel.

かぬ。錠の生活に慣れぬ私は、此の大戸の錠の用法に就いて、容易に要領を得ないので、暫くまごついた。同宿のT君は嘗て錠を忘れて、遂に一夜をホテルで過された事があるといふ。

巴里に来て始めて西洋の旅館に宿つた。私の部屋は戸を閉めると、錠がなければ外からは開けられぬ。それにも拘らず、内から又錠を下す爲に、別の錠が備へ付けてあつた。

只今の宿はS君の向隣であつて、同君が讀書の燈は、窓から坐りながら見られるが、しかも同君の部屋を尋ねる爲には、錠の下りる戸を四度通らねばなら

ぬ。白晝に尋ねても、一度は鈴を鳴らして、内から戸を開けて貰はねば、同君の部屋の戸を敲く譯には行かぬ。

私はブリュッセルとパリを見ただけであるから、俄に斷言は出来ぬが、恐らく西洋諸國に於ける鍵の數は、人口の幾倍かに當つて居るだらうとおもふ。聞く所によれば、此の巴里市の各停車場で下車乗車する者、日々三十三萬人、地下鐵道に乗る者、日に百七十萬人といふが、假に是等の人々が五箇づつの鍵をもつて居るとしても、此の巴里市だけで、一日約一千萬の鍵が汽車に乗降りする筈である。其の外電車に乗り、

個人主義

自動車に乗り、馬車に乗り、乃至は靴に乗つて歩いて居るものを數へ上げたならば、往來して居る鍵だけでも、恐らく半億に達するであらう。實に西洋は鍵の世界である。西洋は個人主義の國である。それ故部屋を固めるのに厚い煉瓦の壁を以てし、出口に重い戸を設け、戸に丈夫な錠を下し、蟄居する時は敢へて之を窺ふを得ざらしめて居る。

蟄居

家族主義

此の地に在つて遠く日本を顧れば、日本は實に家族主義の國である。而して日本の家族主義が、西洋の個人主義と恐ろしい差異を有するが如くに、日本人の住居の様は、恐ろしく西洋人のそれと相違して居

る。錠を下した重い戸の代りに、日本では紙一枚の障子で部屋を圍んで居る。出入自在である。共同主義である。縦令一軒の家が五間になつて居ようと、十間になつて居ようと、實は一間の家である。五間、六間乃至數十間の室が離れる如く、即くが如くにしても、茫然漠然自ら一室を成してゐるのが、日本の家である。此の「家」は實に日本獨特のものである。夫婦はじめ家族一般相倚り、相信じて一體をなし、其の間一點の秘密をも存せざる所が、日本の「家族」の精神である。

此の精神を建築で現せば、即ち日本流の家屋になる。錠を下した戸の代りに、紙で張つた障子になる。西洋にも日本流の家屋は造り得られる。併し例へば此の巴里の真中に、さやうな家を造つて見ても、之に住み得る巴里人が居ない。西洋人は室をもつて居る。併し西洋には家が無い。家をもつて居るのは、世界の文明國中唯日本人だけである。

—祖國を顧みて—

三三 談義僧

請侍 柴田鳩翁

或山家より京の町へ談義僧を招待に参りました。折ふし其の日は雨ふりて道もわるく、駕籠をもつて迎に來ました。和尚もやがて用意して駕籠に打乗り、京を離れて三四里許と思ふ所で、どうした事か駕籠

不承不承

の底が抜けました。いたはしや、和尚は袈裟も衣も泥まぶれになられた。迎の人足も氣の毒がり、そこら駈廻つて、繩きれ多く拾つて来て、やうく、と駕籠をか  
らげ、さて和尚に再びお乗りなされといふ。和尚も氣味わるけれど、雨は強し、袈裟は汚れる、晝中にあるくも外聞悪く、不承々々駕籠に乗る時、これ駕籠の衆も  
う底は抜けはすまいか。いえく、氣づかひはござりませぬ。といふゆゑ、乗移ると、昇上げるとの拍子で、また底がめきく、いふ。和尚大きに肝を潰し、これではなかく、安心がならぬ。御苦勞ながら合羽の上から今一度、丈夫に繩がらみにして下され。といはれる。人

法談

勸化

無常迅速

會者定離

足も尤もに思ひ、また繩ぎれを拾ひ集め、合羽の上をシ、横、十文字にからげ、是ではあやまちはござるまい。と、道を急いで或村を通りかゝつた。

折節此の村に法談があつたと見え、參詣の老若、道場の歸り足に、此の駕籠を見つけて、肩衣カミシモをかけたる親仁おやぢが、傍の媪おやぢにいふには、なんと皆の衆、今日の御勸化は有難い事ではござらぬか。いかさま無常迅速むじやうじんそくの世の中、生者必滅、會者定離のことわり、何時如來様のお迎があらうやら知れぬが人の身の上。あれ、あの駕籠を見さつしやれ。どうしても京へ奉公に行た人が死んだと見えて、死骸を在所へつれていぬると見える。

さてはかかないものぢやござらぬか。といふ聲を、駕籠に乗りたる和尚聞きつけ、さては我を死人と心得たか。いまくくしいと、わざと駕籠の中で咳ばらひすと、かの老人は此の咳拂に驚き、急に傍へ飛びのき、小聲に成りて、死人ぢやと思ふたら、どうでも科人ぢやさうなめつたに側へ寄るまいぞ。といふ。和尚愈腹を立て、今はたまりかねて、駕籠の中でぢだんだん踏み、大聲あげて、科人ではおられない。といふ。其の聲にまたびつくりして、さては科人ではなうて、どうでも氣ちがひぢやさうな。といはれた。是が面白い話ぢや。何分駕籠を外から繩がらみにしたもののゆゑ、誰に見せて

ダッラコエ  
ルリッヤ  
とらう。

道歌

も死人ぢや。然るに中から物いへば「科人」といふもことわり、また「氣ちがひぢやさうな」といふのも、外からこじつけていふのではない。皆此の方に其の相、其の模様があるによつてぢや。これでよう御合點をなされませ。よいものをわるいと人は人はいはぬ。何事も身を省るのが肝心ぢや。或人の道歌に、  
世の中は何もいはずに伊豫簾  
其の善悪は人に見えすく。 — 續鳩翁道話 —

縁故  
カモナシ  
例ハ  
カモナシ  
カモナシ

(一)上杉景勝。  
(二)徳川秀忠。

三四 榊原康政

新井白石

慶長五年の秋、奥の景勝御追討のとき、康政、中納言

酒井 徳川 本多 天四 皇

(一)東山道。

(二)眞田安房寺昌

幸。

(三)信濃國小縣

(四)信濃國北佐久

殿の先陣を打ちて下る。かゝる所に上方にも軍起りぬと聞えてければ、まづ此の所の軍をば止め、引きかへして上方へ向はせ給ふべきにて、中納言殿は山道(一)を打ちて登らせ給ふに、信濃の眞田が上田の城(二)に立てこもつて、御勢を遮らんとす。本多佐渡守正信申す、「安房守が勢にて城を出て戦はんこと叶ふべからず。たゞ打棄て、片時も早く御登りあつて、海道の軍のやうを聞し召しあはさるべし」と有りけるに、大番の人、はしたなく、城の兵と行逢ひて軍しいだし、城既(三)に落つべかりしを、佐渡守制し止めて、小諸の城(四)に御陣移させ參らせ、軍せし輩を罪科に處す。これ御下知を

待たずして軍せし故なりけり。こゝより間道(一)を経て上らせ給ふ。正信が計らひにて、直路は敵に近しとて、避けられし故とぞ申しける。

康政は眞田が軍せんやう、如何ほどの事かあらん。打出てなば蹴散らして、その城を踏み破つてくれん(二)ずものをとて、おのが手勢ばかりにて、城近く押(三)して通るに、昌幸敢へて止めんとせぜ、關が原の軍事終りぬと道にて聞し召し、中納言殿殊の外憤らせ給ひて、御馬を早められし程に、近江國草津の宿(四)にて、徳川殿に參りあひ給ふ。されども大御所内々御氣色宜しからざる事あつて、三日を過ぐるまで、御對面ましま



さず。こは如何なる事ぞと、御家人等驚きあへり。まして山道の御供にさぶらひし輩、大いに恐れをのゝく。康政夜に入りて、徳川殿の御前に参り申すやう、こたび中納言殿御不審蒙らせ給ふ事、康政等が罪科最も輕かるべからず。たゞし風聞の及ぶ所、中納言殿、上田の城を攻めおとし給はず、又押しても御通りなく、殊に海道の合戦にもあはせ給はぬことを、御不審ありと承り候ひぬ。若し此の條に候はんには、恐れある申事に候へども、殿の御誤なきにしもあらず。抑、殿は今月朔日に、江戸を御首途（一）あつて、同十一日尾張國清洲の城に入らせ給ひ、僅かに二日を過ぎて、美濃國へ

（一）九月。

（一）石田三成。

御陣を進められ、十五日に至りて、御合戦事畢りて候。誠に御父子一所（一）に三成等を御誅伐あらんと思し召されなば、かねて軍の御首途あらん期（一）をも告げさせ給ひ、また海道よりも御使を参らせられ、山道の御勢を催さるべき事ならずや。また今暫く清洲の城に御陣を止められ、山道の御勢を待せ給ふとも、三成等が謀如何ほどの事か候べきに、など御軍をば急がせ給ひ候ひしやらん。然るに唯今に至りて、偏に中納言殿の御怠りにのみならせ給ふこと、御不運とこそ申すべけれ。と、憚る所なく申しければ、さればこそ、八月晦日の日使を馳せて、明日首途す。と告げ、山道の勢も急

ぎ馳上りて、軍の手合せせよ。といひつれ。と宣ふ。康政「さん候。其の御使今月七日、小諸の御陣へ來り畢んぬ。夫故にこそ、中納言殿も驚かせ給ひ、道のほど御急ぎあつて候ひつれ。常だにも、日本第一の難所と承る木曾の細道を、大雨を冒し、大軍をひきゐて、一日がうちに十五六里が程を御馬を進められしかば、馬も人も、皆疲れはて、候ひき。」と申す。徳川殿、やあ、其の使は如何にかくは遅く参りけるぞ。と、御使を召して御糺問ありしに、霖雨ふりて、此處彼處水嵩増り、人馬の通ひ絶えて候ゆゑに、遅参に及びぬ。と申す。康政重ねて申しけるは、また上田の城を攻め給はざりしは、古い者

共が強ちに諫め止めまゐらせし故なりき。中納言殿には、攻破つて御通りあるべし。と御説ありしかど、年老いたる輩を附け参らせられし事は、諫をも進め、謀をも獻れとの御事に候。たとへ御心に叶はせ給はぬ事なりとも、我等が諫に従はせ給はんが、大殿の御心に任せらるゝにあらずや。と申しける上は、御心にも任せ給はず。されば彼の城を攻めん攻めじの争にも、日をこそ移し候ひつれ。それ父子の御中にてわたらせ給へば、すべての事の御教訓には、如何ほどの御勘氣もなど無からざらん。御年も壯(一)にならせ給ふ御子の、行末は天下の事をも知ろし召さるべきを、弓矢取

(一)秀忠時に二十歳。

りての道に、父の御心に叶はせ給はざりしと人の侮り申さんは、御子の耻辱のみにあらず、父の御身にも如何でかその嘲を免れさせ給ふべき。これ程の御遠慮ましまさぬこそうたてけれ」と涙を流し諫め奉れば、徳川殿御心とけて、明くれば九月廿五日、伏見の御城にて御對面ありて、海道の軍のやうを御物語あり、山道の事をも問はせ給ひしかば、中納言殿みづから御筆を染められ、康政が此の度の心ざし、我が家の有らん限りは、子々孫々に至るまで、忘るゝ事あるまじき由の御書を賜はりしとぞ聞えたる。——藩翰譜——

### 自修文

#### 一時 間

ナポレオンは最もよく時間の大切なるを知れる人なり。その比類なき大功を奏したるも、多くは時間の使用その妙を極めしが故なり。嘗て塙地利軍の敗北を嗤つて曰く、彼等は五分間の價幾何なるかを知らざるが爲に敗れたるなり。この時間の英雄ナポレオンも、ウスターロー大戦に於て自ら時を誤りたるを、部將グルシーの遅参したることによりて、一敗地に塗れたんぬ「思ひ立つ日が吉日」とは成功の秘訣を教へたる名言なり。思ひ立つや否や直ちにその事に取りかゝれば、興味湧くが如く、わが身の勤勞に服し居るを忘れて、たゞ快樂を取り居るを覺ゆるのみ。随つて事業の進歩も自ら速なり。もし思ひ立つ日に始めざらんか、當時の興味は索然として消失し、之を始む

〔一〕Napoleon I. 佛蘭西の皇帝  
〔二〕Austria. 奥地地利軍  
〔三〕Waterloo. 滑鐵橋の戦  
〔四〕Gravelly. 滑りやすい  
〔五〕思ひ立つた日 最も立派な事をするに、即ち思ひ立つた日の思ひ立つた日

索然  
おもしろみの  
ないさま。

〔Heracitus.〕  
希臘の哲學者  
（西曆紀元  
前五三五頃  
四七五頃）

〔Walter Raleigh.〕  
英國の政治家  
學者、軍人、探  
検家、航海家  
を兼ね世界歴  
史の著あり  
（西曆一五  
八一—一六  
八）  
〔三〕明日ありと  
思ふ心のあだ  
櫻よはに嵐  
の吹かぬもの  
のかかぬもの  
上人の詠なり  
といふ  
茫然自失  
ほんやり氣ぬ  
けのするこ  
と。  
分陰  
陰わりの光

るに非常なる困難と苦痛とを感ずるのみならず最後の結果に至つても、即時に着手したるに劣ることを免れず。故に或大商店の如きは規則を設けて、郵書は即日返答すべし。と定めたりといふ。蓋し事をなすは種子を蒔くが如く、一度季節を失へば、終に之を蒔くを得ざること多し。ヘラクリトス曰く、汝は同じ河水を以て再び沐浴するを得ず。と蓋し河水は流れて息まず。時は往いて還らず。大事も、興味も、元氣も、熱心も、一度去つては復得べからざるをいふなり。

〔二〕ウォルター・ローリーは僅少なる時間を以て多くの事を成したる人なり。その術を問へば則ち曰く、何事にもなさねばならぬ事は、直ちに之を爲すにあり。と。あゝこれ語淺くして、意深きものにあらずや。世の失敗者を見よ。多くはこれ明日ありと思ふ心のあだ櫻、夜半の嵐に吹拂はれて、なほ茫然自失せるものに非ざるはなし。鐵は熱せられてなほ赤きうちに打つべし。枯草は太陽の輝き居る間に乾かすべし。事は時機を失はずして始むべし。古より偉人と呼ばれ、豪傑と稱せられし人は、大抵みな分陰をも惜しみて機會を捉へし

人なり。

時を誤るものは責任を誤るものなり。斷じて世間の信用を受くることなし。〔一〕ウォシントンの書記一日遅刻せり。辯疏するに、己が時計の後れ居りしを以てす。ウォシントン直ちに告げて曰く、汝は正確なる時計を買ふべし。さなくば予は他の書記を備ふべきのみ。と。フランクリン常に遅刻勝なる奴僕をわらつて曰く、善く辯解する人は何にも役に立たぬ人なり。と。ネルソン或時軍艦に乗らんとす。その前夜御者來りて、明朝正六時に馬車をまはすべし。といふや、彼は曰く、それより十五分前に來るべし。一定の時より十五分前にあるは、予が予たる所以なり。と。ナポレオン一夕諸將を晚餐に招く。期に及んで諸將なほ來らざりしかば、彼は一人にて食事を始めたり。食ひ終りて方に食卓を離れんとする頃、諸將の漸く來れるを見て曰く、諸君、既に食事の時間は過ぎたり。請ふ、各自の職務に服せん。と。凡そ時間を大切に守るは勤勉の習慣を生じ、責任を盡し、義務を重んずる所以にして、身を立つる基なり。

——立身策による——

〔George Washington.〕  
米國第一代の  
大統領（西曆  
一七三二—  
一七九九）  
辯疏  
のわけ。  
〔Benjamin Franklin.〕  
米國の政治家  
學者（西曆  
一七〇六—  
一七九〇）  
〔Horatio Nelson.〕  
英國の海軍提  
督（西曆一七  
五八—一八〇  
五）  
期に及んで  
時期になつ

(一)動物學者、理  
學博士、東京  
高等師範學校  
教授

## 二 生存競争

丘<sup>(一)</sup> 淺次郎

地球上には各種の動植物をして自由に増加せしむべき餘地は無い。そこへ各種の動植物が多數の子を生むのであるから、互の間に劇しい競争の起るのは見易い道理ではあるが、其の有様を詳しく論ずるには、まづ諸生物の生活する有様から考へてかゝらなければならぬ。

動物の中には、獅子、虎、狐、狸のやうに肉を食ふものもあれば、牛、馬、羊、鹿のやうに草を食ふものもあるが、獅子、虎等の餌となるものは、やはり草を食ふ動物ゆゑ、動物の食物は、直接にか、間接にか、必ず植物より取る外はない。又海産の動物を見るに、三尺の魚は一尺の魚を食ひ、一尺の魚は三寸の魚を食ひ、三寸の魚は一寸の蟲を食ひ、一寸の蟲は三分の蟲を食ふといふやうな<sup>場合</sup>で、これもこれも、皆肉食動物ばかりのやうであるが、最も小さな蟲類は、大洋の表面全體に浮いて生活する無限の微細藻類を餌にするから、此の場合にも、動物の根原はやはり植物界にある。

かくの如き有様ゆゑ、植物なしには草食動物は生きて居られず、草食動物なしには肉食動物は生きて居られぬ。草を食はなければ生命が保てぬのが草食動物の天性であるから、草食動物を飼ふ人は、初から毎日若干の草を犠牲に供する積でなければならず、又他の動物を食はなければ生命が保てぬのが肉食動物の天性であるから、肉食動物を飼ふ人は、初から若干の動物を殺す覺悟でなければならぬ。草と草食動物と肉食動物とが相並んで、互に犯さず、共に生存して行くといふことは到底出來がたい。

又長閑な春の日に、野外を散歩して見ると、草木の青々と茂り、花の美しく咲いて居る處に、蝶が面白さうに飛びまはり、小鳥が楽しさうに歌つて居る。詩人は之を詩に作り、畫家は之を繪にかいて、共に此の世の樂しさを賞めた。たへるが、之は極めて皮相な感<sup>じ</sup>で、少し丁寧<sup>に</sup>考へて見れば、世の中は決してそんなに無事平穩なものではない。鳥がかく歌つて居られるのは、今日までに數十萬の蟲を食殺した結果で、歌ひながらも、なほ蟲の命を取らうと探して居る。又蝶がかく舞つて居られるのも、幼蟲の頃に澤山の菜類を食ひか

皮相  
うはつちら。

## 二 生存競争

風前の燈  
風にあふられ  
るにも消えさ  
うな危い運命  
にたとへる。

らした結果である。而して彼處の樹の枝には、蝶を捕へて殺して食はうと、蜘蛛が網を張つて待つて居るし、此處の樹の頂上には、小鳥を捕へて殺して食はうと、鷹が鋭い目を張つて狙つて居るから、蝶の命も、小鳥の命も、殆ど風前の燈の如く、一つ油断すれば忽ち食殺されてしまふのである。なか／＼氣樂に遊んでばかり居られぬ、動植物は總べてかくの如く相殺し相食うて、自然界の平均を保つてゐるのである。

かゝる所へ、年々歳々動植物の各種が夥しく子を産むのであるから、其の多數は無論他の動物の爲に餌として食殺され、生殘るものも餌を得る爲に甚だしく相争はなければならぬ。動植物の増加力は實際無限であるが、それは代々生れる子が悉く生存し繁殖するものと假定した上のことで、現在の如く毎回生れる側から他の動物に其の大部分を食はれてしまふ場合には、素より著しい増加の出来る筈がない。猶其の上に一地方に於ける各種の動物の食物の總量には常に制限があつて、生殘つたものを皆養ふことは到底出来ぬが、假に兎が一疋居るのを犬が二疋で見付けたとしたならば、先に兎

飽食

腹いっぱい食ふ

こと。

古往今來

昔から今まで

の間。

〔Abraham

Lincoln

の

米國第十六代

の大統領

が農

家の生れ

を法

廢止し、奴

力止運に盡

選ばれた。領

名な南北に

（西曆一八六

二年）を起し、

奴隸廢止に

對し米國反

し、諸州を征

一實行した。大

統領が再四た

兎徒に暗殺さ

れた。西曆一

八〇九一

六五）

稀有

ごとく

てめづらし

い

を捕へた犬は飽食し、後れた方は餓死せねばならぬ譯ゆゑ、如何なる動物も食ふ爲の競争は免れぬ。又兎の二疋居る所へ犬が一疋來れば、速く逃げた兎は生殘り、遅い方は食はれてしまふ譯ゆゑ、大抵の動物は食はれぬ爲の競争も避けることは出来ぬ。動植物ともに各自皆食ふやうに、食はれぬやうに、殺すやうに、殺されぬやうにと競争して居るのが、實際の状態である。植物でも一本以上生ずることの出来る區域に、二個の種子が落ちれば、此の二個は互に競争の位置にあるもので、結局は其の中いづれか一個だけより生存することは出来ぬ。植物とても競争の烈しいことは、決して動物に劣るものではない。

—進化論講話—

### 三 リンカーンの少年時代

完全無缺の人物は、古往今來決してあるものではない。併し完全に近い人物を求めたならば、アブラハムリンカーンの如きは、實に其の一人であらう。英雄豪傑は必ずしも得難くは無いが、完全に近い人物は眞に稀有なもので

德萬世に輝く  
徳がいづまでも  
消えないやいて  
澤四海に溢る  
めぐみが國の  
外までもあふ  
れる。

追慕  
後世からした  
ふこと。

(一) Kentucky.  
(二) Hardin.  
(三) Nolin.

呱呱の聲を  
舉ぐ  
はじめて生れ  
る。呱呱は赤  
子のなきご  
ゑ。

田圃  
田はたけ。  
たんぼ。  
勞役す  
ほねをりはた  
らく。力仕事  
をする。

寸毫の暇  
すこしのひ  
ま。毫は一厘  
の十分の一  
で、ごくわづ  
かの意。  
營々  
あくせくする  
さま。  
大成す  
人物として完  
全に出來上  
る。  
素性  
うまれ。身も  
と。

敢へなくな  
る死ぬ。

ある。

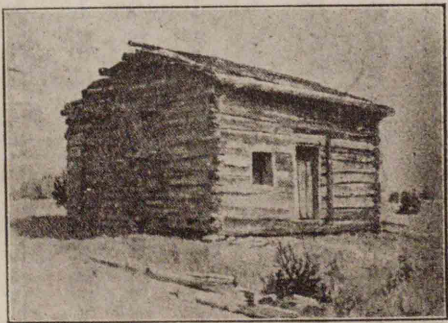
リンカーンは北米合衆國第十六代の大統領である。智あり、勇あり、義あり、愛あり、その徳は萬世に輝き、その澤は四海に溢るゝ人である。余は今此の大人物の少年時代の話をして、聊か追慕の意を表したいと思ふのである。

かゝる大人物も、其の生れは極めて賤しく、生れた所すら、唯ケンタッキー州中、當時ハルデンと稱へた片田舎のノーリン河の邊といふだけで、今日は遺跡とても残つてゐない。彼の両親は極めて貧しく、家と稱する程の住居も無く、丸木の小屋に住んで居つた。この丸木小屋こそ、實に千古の大人物アブラハム・リンカーンが呱呱の聲を擧げた處で、時は西曆一千八百九年二月十二日、春雪正に解けて、梅花綻ぶる時節のことである。

父は憐むべき日雇で、日々他人の田圃に勞役し、母は炊事裁縫一切の家事を勤むる外に、他家へ洗濯に雇はれたり、近傍の森や林で薪を拾つたりして、其の日其の日の微かな煙を立てゝ居つた。リンカーンは七歳の時から、父に隨つて森に行つては、細い腕に小さい斧を揮つて、開墾の業を助け、畠へ出て

は、鋤を執つて耕作の手助をもして、十年餘り寸毫の暇も無く、營々として勞働を續けて居つた。

かゝる貧苦の間にも、常に彼を、教へ、彼を勵まして、他日大成すべき基を作つた人がある。それは誰でも無い、即ち彼の母親である。この母親は素性の賤しきに似ず、至つて賢明な婦人で、常に人間の價値はその身の貧富、貴賤によつて定まるもので無く、その精神の如何によるものである事を教へた。そして、御身を學校に入れて、それもかなはぬ。せめては母が覺えた一通りを教ふる程に、農事の暇に精出して勉強せよ。と懇に言ひきかせて、第一に習字、次に讀方を教へ、朝は早く起しては習はせ、夜は疲勞を忍ばせては教へたが、不幸にもリンカーンが十歳の時、敢へなくなつた。彼は天を仰ぎ地に俯して歎き悲しんだが、今は致方も無いので、父と共に泣く



家たれ生のンカーンリ

野邊の送式とむらひ。葬

英里イギリスの里一哩は十四町四十五間餘。  
赤貧非常な貧乏。  
すかんびん。

伶俐かしこいこと。りこう。  
不屈物に屈しないこと。我慢づよいこと。  
露天の下大空の下、即ち野外の意。

泣く野邊の送を營んだ。  
父は素より日々の勞役に追はれて、その子を顧る暇は無。母亡き後のリンカーンは、暗夜に燈火を失つた心地。せめて一年、半年なりとも小學校に通ひたいと、切りに父に訴へたので、父も餘りの不便さに、遂に之を許した。リンカーンは天にも昇る心地で、日々九英里餘の路をも厭はず、一回の缺席もしないで、田舎の小學校に通つたが、哀れにも赤貧の爲に、僅々九箇月にして、復廢學せねばならぬ事になつた。嗚呼、この九箇月こそ、彼が前にも後にも、一生涯中に受けた學校教育の全體である。

これより彼はまた、日々鋤を執つて田圃に働く身となつたが、或は種を播き、或は草を刈る時にも、常に一二の書卷を携へてゐた。その書は綴字書、算術書、文法書の三種であつた。彼の性の伶俐なる、又その精神の不屈なる、耕作の暇々に、露天の下で、教師も無くて、よくその意義を理解することが出來たのである。かくて朝には此等の書を携へて出で、夕には之を携へて歸り、暇ある毎に怠らなかつた爲に、久しからずして、この三書を一章一句も残さず、悉く

思を焦すしきりに氣をむむ。

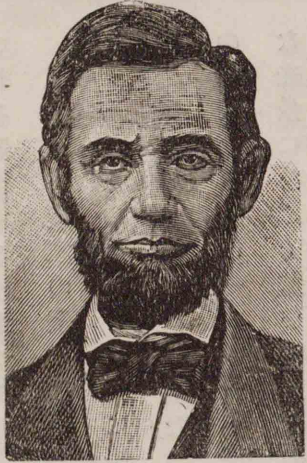
雀躍ことをどりすること。喜んでとび上るのにいふ。

後の祭時機を失して役に立たなくなつたこと。

とやかかくあいかうと。いろ／＼と。  
Page.

暗記するに至つた。

十三四歳の頃、その隣に、かねてその名を聞いてその功業を敬慕せるジョージ・ウォシントンの傳記を藏することを知り、讀みたいとは思ひながら、賤しい身分を耻ぢて、思を焦して居たが、一日遂に思ひ切つて、その借覽を請うた。幸



に其の人は、快く貸してくれたので、リンカーンは鬼の首でも取つた心地で、雀躍して家に歸り、丁寧に戸棚の中に入れて置いた。ところが不幸にもその夜大風雨があつて、彼が爲に一大事が起つた。彼が驚き覺めて、借りた本のことを思ひ出し、濡しては大變

と、急いで取出して見た時は、もう後の祭の隙間から吹込んだ雨に濡れて、さんざんになつて居るので、大聲あげて泣いた。子供心に心配して、其の夜は終夜眠らず、翌朝とやかかくと案じたが、正直に次第を述べて罪を謝する外は無いと決心して、濡れ破れてページも分らなくなつた書を持つて隣家に行



耽讀  
よみふけること。  
讀過  
全部よみ通すこと。  
品性  
其の人のもつて居る性質。  
人柄  
體得す  
のみこみ、會得する。  
深更  
夜中。深夜。  
一心不亂  
心を或物事に専らにしないで、いっしょけんめい。

き、泣いて詫をし、其の代りに、二日でも三日でも勞役をさせて下さい。」と頼んだので、貸主もその心を察して、別段に之を尤めず、その意に任せた。そこで彼はウォシントン傳を携へて家に歸り、濡れたページを丁寧に乾かして、晝夜の別なく耽讀した。以來讀過數十遍、この大人物の品性に感化せられて、遂にはこれを體得するに至つた。

又彼が一農家の僕となつて居た頃、或日一人の旅客がその家に宿つたことがある。その旅客が深更に厠かほに行つて、ふと見ると、庭の木立を洩れて燈火の光がさしてゐる。不思議なことに竊かに行つて見れば、思ひがけなくも、裏の粗末な長家に、一人の少年が一心不亂に書見をして居る。旅客はこの意外な光景にひどく驚いたが、その夜はその儘我が室に歸り、翌朝家の主人にこの事を尋ねた所が、主人も、彼は感心な少年で、晝間は畑に出て、寸暇を得れば書を讀み、夜も夜業が終れば、更くるまで勉強し、分らぬ事があれば人に質し、學問を此の上なき樂みとしてゐる。しかも温順で、謙遜で、正直によく働いて、才智もあれば、情愛もある。實に末頼もしい少年である。」と答へたといふ事である。この少年こそ、言ふまでも無くリンカーン其の人である。

艱難汝を玉にす  
艱難は其の人を大成せしめる。

(一)名は成行。東京の人。文學者。文學博士。明治小説界先驅者の一。  
俾  
人力車のこと。近く日本て出來た字である。

諸君は、我が國近世の偉人二宮尊徳の、少年時代の勉學を知つて居るであらう。貧家に育つても、よく勉強の功を積んで大成せる東西の二大人物の少年時代は、實に模範とすべきものである。艱難汝を玉にす。リンカーンが他日大統領となり、世界の大人物として萬人に仰がるゝに至つたのも、實に此の少年時代に、貧窮の經驗から得た教訓の賜であるのである。

「アブラハム・リンカーン」による

#### 四 夏季休暇

幸 田 露 伴

樂しき夏休は來れり。行李の紐は既にしめて、俾こゝろだに來らば今にも家に歸り得る程に用意整ひし人もあらん。樂しきは夏休にこそ。君が父母は指折り待ち給はん。君が兄弟は日を數へて待ち居りなん。君が今日の樂みは、今年の樂みの大いなるものの一つなるべし。

歸れ。飛ぶが如くに歸れ。野越え、山越え、はた海を越えて歸れ。歸りて父母の

約 ついでにいふこと。  
 良穀 人生に必要な穀物。  
 生氣横溢す いきいきとした勢がみなぎらふれる。  
 蟲の翅云々 蟲が夕方になつて競争するやうに澤山出るのをいふ。  
 天の鼓 かみなりをいふ。  
 沛然 雨の盛に降るさま。  
 翠光 青光。  
 一庭中 庭中。

家に心緩かにして夏を過せ。休むが爲の夏休なれば、心おちつけて大いに休み、さて來ん秋の九月に入りて、勵み勤むるの精力を蓄ふるぞよき。  
 「夏」といふ語は「成立」の約にして、稻をはじめ種々の良穀、みな此の時に當り成長繁茂し、根を張り幹を伸べて、やがての開花結實の因を爲すをもて、しか呼ぶとぞ。此の頃南風快く吹き、烈日盛に照して、天地の間生氣横溢す。されば千草萬木皆各勢づきて榮え誇るのみならず、鳥の聲は曉に勇み、蟲の翅は夕にきほひ、魚も溯り躍れば、貝も繁殖す。人も春より此の季にわたりては、面色も牙え、身の力も張り、鍛鍊を加ふれば肉體は發達し易き傾あり。  
 思へば、夏の天地はまことに壯快なり。梢を渡る旦の風、空に峙つ雲の峯、さては天の鼓のどろきめぐつて、雷雨の沛然として至るなど、いづれかをかしからざらん。綠蔭に書を讀めば、翠光と詩趣とともに胸に沁み、小樓に箏を弾き已めば、檐の風鈴も清き音を和す。いと暑くて苦しみ日、一庭の穢を掃つて、打水に夕の涼しさを招き、浴後を團扇片手にそゝろあるきしたるなど、其の樂しさは冬はもとより、秋にもはた味はふべからざるものあらん。

煩しからぬ心云々と。心配のないこと。

生涯の一部 一生の中の一部。分なれば、いかに休なれば、いとて無益に過すなどの意。

もつさう 飯を盛つて人毎にそなへる器。  
 搖籃 子供を眠らせるゆりかご。  
 子供の時分育つた所をいふ。  
 屏風を立廻す 屏風を立廻して居る意。

よろづの家具ごもを亂りがはしからず取片づけ、襖障子開放ち、さては廂まはり、縁側なんご清らに掃ひ拭き、汚れぬ衣被て、煩しからぬ心持ちたらんには、夏はまことに好き時節なるべし。熱し、苦しどのみ口癖に言ひて、我が務を怠り、或は晝寢に身を倦ませ、朝寢に心を荒せては、夏ほど苦しみ時は無かるべし。休み慰めんが爲の夏休なれども、意味なき怠に、快からず長き日を暮さんは惜しむべし。  
 夏季休暇の四十日、又これ君が生涯の一部ならずや。

五 僕の故郷

徳(一) 富 蘆 花

僕の故郷は九州、九州のちよつと真中で、海に遠い地方の、幅一里、長さ三里といふもつさうの底見たやうな谷が僕の搖籃である。ごちら向いても雜木山がぐるりと屏風を立廻し、其の上から春は碧くなり、冬は白くなる。遠山が、ちよいちよい顔を出して居る。最も高いのは東に一つ孤立した高鞍山で、誰がてつべんに乗りすてたのか、さながら鞍を置いたやう。雨が降る前には必

たぎる  
あふれる。

早少女  
田植をする  
女。田植女。

す此の山に霧がかゝり、此の山が見え出すと、如何やうに降つて居ても、やがて霽れる。雲がかゝるのも、日が射すのも、まづ此の山が第一で、いはゞ僕の故郷の氣象臺だ。四方の山から滾々と湧出づる清水はたぎりよつて、村人のいはゆる大川、小川の二流となり、十分に谷を潤して居る。谷は一面の田、其の田を無理におしのけて、此處に村が一撮彼處に家が二三十。北の隅にあるのが妻籠の里といつて、まづ此の谷の都で、町といへば町、戸数は千に足らない。取出していふほごでも無いが、今も忘れ難く思ふのは、水の清いのだ。稲の美しいのである。たしか東京に積出して、鮭米にするさうな、實に其の稲葉のつや／＼と青んで、のび／＼と立揃つた所は、都人士に見せもしたい。實に見せたい。蛙の聲を踏分けて、一村總出の田植時、早少女の白手拭がひらり／＼と風に靡いて、畦から畦に田植歌の流れる頃の、にぎはひを、それから炎天の田草取は、傍で見てもつらいが、しかし夕立、暑い、たまらぬといふ下から、ごろり鳴り出す。突然空気が冷える。ふつと見ると、黒雲がもう高鞍山を七分通り呑んで居る。それがインキの散るやうに、すうと満天ににじんで来る。稲妻

白雨  
ゆふだち。  
はかあめ。  
しなびる。

蟲送  
鐘や太鼓を叩  
いたたりして稲  
田の作物につ  
いた害蟲を祓  
ふ祭事  
露より明け

夜があけると  
第一に露が光  
るのていふ。  
二百十日  
立春から二百  
十日。立春  
は春の初日。春  
平年の二月で  
二月十日は普  
通。九月十日  
あり。十日は  
来に十日は  
日作に風が襲  
てある。厄農

がきらり。夥しい雷鳴二つ三つ。冷たい風がさつと吹いて来ると、やがて大粒の雨がぼつり、耳を掩うた太郎作がまだ半町と逃延びぬ中に、鳴る、光る、降る、吹く、世の終かと思ふ程の荒れやう。と思へば忽ちすうつと明るくなつて、やんだやうだ。と出す顔へ、あがりぎはの白雨二筋、三筋、笠おつ取つて出て見る。頃は、夕立は最早五六町逃げのびて、隣村はさながら簾ごしになつて居る。大空を真二つに割つて、東の方はまだ真暗、雷様がごろ／＼太鼓を敲いて居るが、西の方はあか／＼と夕日がさして、高鞍山のでつべんと思ふあたりから谷へかけて、すばらしい虹が立つて居る。嗚呼、涼しい。先程まで萎えしをれて居つた稲が、たつた一瞬の間に、眼も醒める程あを／＼となつて、一二寸も伸びたやうに、どこを見てもざわ／＼とさ／＼めいては、露を揺りこぼして居る。獨り泡だつ田の水は、ごく／＼溢れて、小鮒や鱒がやたらに畔路にはねて居る。蟲送も濟んで、初秋の風をよ／＼と稲葉に音づれる頃は、夜は露より明け、朝日に匂ふ稲の花の美しさ。二百十日、二百二十日の厄日も事なく過ぎて、

(一) United States of America.  
 (二) 株式會社。明治十八年設立。  
 (三) Seattle. 北米合衆國ワシントン州の港。  
 (四) 株式會社。明治二十九年設立。  
 (五) Hawaii. 北太平洋中にある十餘の群島の北米合衆國の領土。  
 (六) San Francisco. 北米カリフォルニア州太平洋に面せる良港。  
 (七) Pacific Ocean. 航海のみちのり。  
 (八) South America.

青疊敷いた谷間がいつしか金色に照つて、此處にもざわ／＼、其處にもざ／＼と収獲のさかりになれば、誰を訪ねても家には居ない、皆田に出て居る時雨<sup>レ</sup>が降出すと、夜晩くまで靄<sup>レ</sup>の音が聞えて、高鞍山に雪が見える頃は、つい先月まで田にあつた稻が、最早綺麗な米俵になつて、倉や納屋に積まれて、農夫は新酒に舌鼓打つて、豊年を祝ふのである。

— 思田の記 —

### 六 世界の旅行

世界はまるい。東へ東へへ行つても、西へ西へへ行つても、また本の所に戻つて来る。

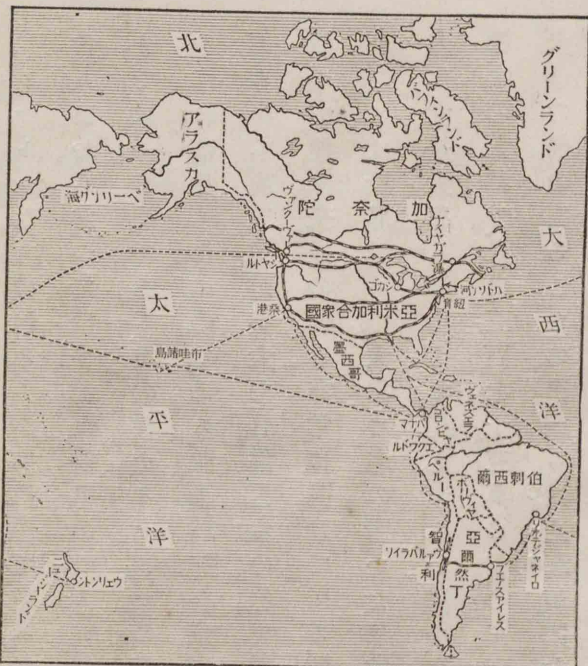
日本から東へ向つて亞米利加合衆國へ行くのは、日本郵船會社の汽船で、シヤトルへ行くか、又は東洋汽船會社の汽船で、布哇<sup>(五)</sup>を通つて桑港<sup>(六)</sup>へ行くのである。此の太平洋の航路は航程三千哩、日數は十七日程かゝる。いづれも大きな船で、船中には客室が澤山あり、食堂や遊戯室もあつて、何一つ不自由な事は無い。南亞米利加の國々へは、東洋汽船會社の船が通ふ。

(一) Chicago. 合衆國イリノイス州の都。  
 (二) Atlantic Ocean. 北米第一の都會。良港灣を有し、商工業の盛なること、英京倫敦に次ぐ。  
 (三) Niagara. 世界第三の瀑布。第一の瀑布は阿弗リカのビクトリア湖、第二は南米のイグワフ瀑布。  
 (四) 天産物。日進月歩。日毎月毎に進んでゆくこと。  
 (五) 鐵道網。鐵道の四方に通じて居るのを網にたとへたもの。  
 (六) Hudson. 波止場。船が横づけになるやうに造つた突堤。

シヤトルなり桑港なりから、汽車で東へ進めば、三日目に合衆國第二の都會、人口から言つて世界第五番目のシカゴに着く。こゝから大西洋岸の紐育<sup>(三)</sup>までは一日路である。有名なナイアガラの瀑布は、此の途中にちよつと寄道をすれば、見られるのである。亞米利加合衆國は天産物が豊で、人民が勤勉であるから、商工業が盛大で、日進月歩の勢で發達して居る。鐵道網は全國に行渡つて、運輸交通の便も非常に開けて居る。教育もよく行はれて、圖書館の多いことは世界第一で、大學と名の附いた學校も、全國では五百以上もあり、有名な女子大學も澤山ある。但し新しい國で、歴史的趣味は乏しい。紐育は世界第二の大都で、人口五百七十三萬と言つて居る。海からホドソン河<sup>(五)</sup>へかけて大きな船の寄ることの出来る波止場<sup>(六)</sup>が第七十何號まであるのを見ても、其の繁華な有様が思はれよう。

こゝを船出して大西洋を横ぎれば、早い船ならば四日半、遅い船でも十日餘で英國の港に着ける。其の外、佛蘭西や、西班牙や、和蘭へ直接に通ふ船も勿論ある。

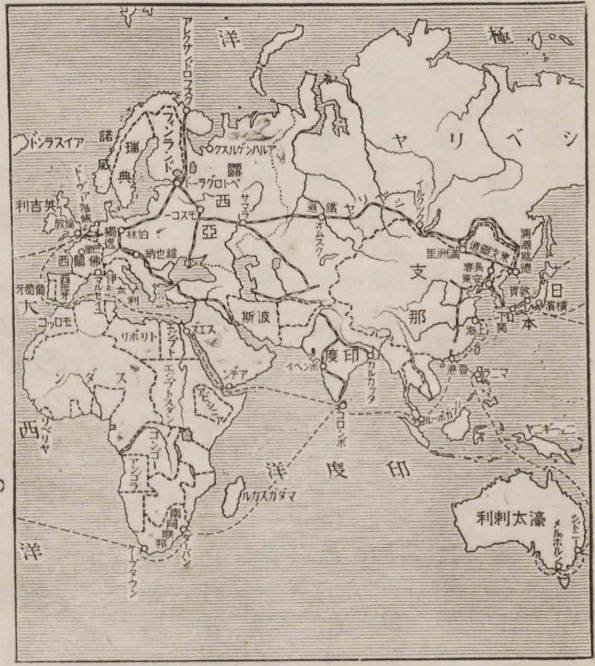
(一) London. 潮流の關係  
 (二) Mejierra- 潮流の關係  
 (三) Indian Ocean. 潮流の關係  
 (四) Paris. 潮流の關係  
 (五) 潮流の關係  
 (六) 潮流の關係  
 (七) 潮流の關係  
 (八) 潮流の關係  
 (九) 潮流の關係  
 (十) 潮流の關係  
 (十一) 潮流の關係  
 (十二) 潮流の關係  
 (十三) 潮流の關係  
 (十四) 潮流の關係  
 (十五) 潮流の關係  
 (十六) 潮流の關係  
 (十七) 潮流の關係  
 (十八) 潮流の關係  
 (十九) 潮流の關係  
 (二十) 潮流の關係



英國の首都倫敦は北緯五十一度三十分にあつて、日本の樺太よりもつと北方にあるが、潮流の關係で其の割合に寒くない。實に世界第一の大都會、其の賑しさも一通りで無い。日本から郵船會社の船で印度洋を西へ西へと航海しても地中海を通つて、こゝに到着することが出来る。

倫敦から佛蘭西までは海峡の最も狭い所を越えれば、一時間で行ける。廣い所でも七八時間間の航程である。英國といひ、佛國といひ、亞米利加から來た目で見ると、歴史的記念物も多いし、人情風俗も何となく落着いて居る。巴里は美術の淵藪といはれて居るだけあつて、其の博物館や書廊に入れば、西洋文物

(一) Berlin. 鐵道は東  
 (二) Petrograd. 鐵道は東  
 (三) Siberia. 鐵道は東  
 (四) 鐵道は東  
 (五) 鐵道は東  
 (六) 鐵道は東  
 (七) 鐵道は東  
 (八) 鐵道は東  
 (九) 鐵道は東  
 (十) 鐵道は東  
 (十一) 鐵道は東  
 (十二) 鐵道は東  
 (十三) 鐵道は東  
 (十四) 鐵道は東  
 (十五) 鐵道は東  
 (十六) 鐵道は東  
 (十七) 鐵道は東  
 (十八) 鐵道は東  
 (十九) 鐵道は東  
 (二十) 鐵道は東



つても廣漠な平野、十日目にはマンチュリーに出る。眞直に浦鹽斯德まで乗替へ、長春で南滿洲鐵道に乗替へれば、もはや日本の鐵道であるから、それも一層面白い。長春から安東まで來て鴨綠江を渡れば、日本の版圖内に入るの

版圖 (一)版は戸籍、圖は地圖の意。  
 利器 (二)すぐれた器械の意。  
 (一)櫻癡と號した。舊幕臣。東京、日新、明主、筆、小説、脚本の作もある。  
 明治三十九年、年六十九。  
 (二)竹内保徳。  
 (三)松平康道。  
 (四)京極高朗。  
 (五)英、佛、蘭、露、普、葡の六國。  
 聘問の禮、おとづれ、尋ねるること。修めは致すこと。  
 (六)江戸、大阪、兵庫、新潟。  
 (七)兵庫、新潟、開市。  
 外國人に市を開き自由に出入貿易をさせること。  
 國書 一國の元首が其の國の名で出す外交文書。  
 (八)名は忠順。萬延元年米國に使す。

で、それから下關まで汽車と連絡船とで一晝夜半である。  
 世界も廣いやうで狭い。汽車や汽船といふ文明の利器を利用すれば、此の廣い世界も二月位で一週することが出来る。飛行機で旅行が出来るやうになれば、僅か數日での世界一週も不可能ではあるまい。

### 七 歐洲の初航海

福地源一郎

文久元年十月、徳川幕府は竹内下野守、松平石見守、京極能登守の三人を特命全權公使に任じ、歐洲の諸條約國に赴き、帝王に拜謁して聘問の禮を修め、兼ねては兩都、兩港開市延期の談判を遂ぐべき旨を命じ、諸國帝王への國書及び全權委任状をも、外國の例に倣ひて相渡されたり。

出發の支度については、種々をかきし談柄ごもありて、其の時すら捧腹に堪へざる程の事多かりき。通辯、翻譯に従事せる人々は、西洋は云々なればさる御用意には及ばずと、或は洋人に聞くところに據り、又は書籍にて讀むところを以て三使に申し立て、又小栗豊後守は米國に使せられたる實驗を引

駕籠 人を載せてかついで行く道具。  
 挾箱 おもに衣服などを入れて旅行の際かつぐ道具。  
 英斷 おもひきつた決断。  
 手槍 柄の短い槍。  
 御藏 幕府の米藏。  
 區々 さまん。ま。  
 御手前 あなた。  
 勤向 つとめの事がら。  
 (一)徳川初世の人、長沼濤齋の創めたもの。  
 (二)武田信玄。  
 萬年味噌 いつまでも味の變らない味噌。  
 究竟 しごくよいこと。  
 (三)外國奉行組頭、柴田貞太郎剛中。

いて忠告に及びたれども、否々、米國はさもあらんが、歐洲は又格外ならんも知り難し。洋人の言ふところをうかど信じて、差支あらば日本國の御耻辱なり。とて、容易には従はれず。但し駕籠、持槍、甲冑、挾箱は無用なれば持參に及ばずと、非常なる英斷を以て決したれども、三使だけは手槍及び鞍、鎧等の馬具を持參あるべしとて、持たせられたり。

それより筆、墨、紙等の用意に及び、食料の支度として、米は白米を御藏より受取り、醬油、香の物等は買上げとなし、味噌は腐敗し易き品なれば、通常の物にては其の虞あり、如何すべきと會議區々なれば、我等は切に御持參無用と止めたれども、いかでか採用せらるべき。御手前が勤向の外の儀なれば、御黙りなさい。との一言に叱り附けられ、さあらば御評議次第に、と沈黙して、其の爲すところを見てあれば、其の頃長沼流の軍學者某といへる者の説に、我が流儀には、甲州の信玄以來、軍用として萬年味噌の傳あり。此の傳にて練立てたる味噌ならば、赤道直下に於て太陽にあたることも、決して腐敗の虞無し。といへるを聞きて、それ究竟なり、依頼せよ。と組頭の指圖にて製造を命じ、中瓶

(1) Hongkong. 支那廣東省の沿海の小島にある英國領の港。  
 (2) Singapore. シンガポールの南端に在る島。  
 龍王 海中にあつて雨をつかさどるといふ神。  
 坐臥 おきたりねたりすること。  
 紀律 きまり。おきて。  
 無作法 禮儀に缺けること。行儀のわるいこと。  
 些細の事 こまかな事。ちよつとした事。  
 煩苛 うるさくやかましいこと。  
 難澁 こまること。こんなん。なんぎ。

數箇に詰めて持参したるに、氣の毒なるかな、此の萬年味噌は香港(一)とシンガポールとの間に、早くも腐りて臭氣堪へ難く、乗船士官より苦情ありければ、瓶に入れたるまゝ海中に投入れて、龍王に献上したりき。  
 諸事皆かゝる情況なれば、純然たる日本風にて、文久元年十二月二十二日を以て品川沖より英國軍艦オージン號に乗込み、長崎にて石炭を積入れ、同じき二年正月元日の曉に長崎を出帆して、香港に向ひたり。英國軍艦にては、特別の注意を以て一行を待遇したれども、飲食は全く違ひ、衣服坐臥ともすべて軍艦の紀律に反對なれば、艦長、士官は日本使節の無作法なるに當惑して、其の少しく紀律を守らんことを望み、一行は又艦長、士官等が些細の事に我等の動作に苦情を唱ふるを煩苛なりとして不平を鳴し、それがため、間に挿まりたる通辯、翻譯の諸人は、難澁を極めたり。但し三使の中にも、石見守は最も日本風を守られ、既に香港に於て、一行中の某等が洋靴を買求めて穿ちたるを見咎め、嚴に之を叱責し、國風を紊るを以てこれより日本へ追返すべしとまで言出したるが、某等が散々に謝罪して、漸く宥されたる程なりき。

心底 こゝろのそこ。しんそこ。  
 陣笠 もと陣中で用ひた笠。  
 傲然 おごりたかぶるさま。おぼつたさま。  
 風體 なり。ふり。やうす。  
 (一) 福地櫻痴著。  
 (二) 楚人冠と號する。東京朝日新聞記者。紀伊の人。  
 (三) 京都東北の山。山上に天台宗總本山延暦寺がある。  
 夢云々 安眠の出来ないのをいふ。  
 拂曉 夜のあけがた。  
 蕭颯 さびしくふく風(一)の形容。刻一刻毎にかくて來る所が現れる。

りきかゝる心底なれば、三使及び一行も、西洋諸國巡回中少しも我が國の風俗を紊さず、羽織袴、大小、草履にて陣笠を冠り、巴里、倫敦の市中を遊歩するに更に耻づる色も無く、傲然として大小を横たへ、我こそ日本の武士なれといふ風體にて、大手を振つて歩きたりき。  
 (一) 懷往事談

八 比叡山上の眺望

杉村 廣太郎

往年の秋、比叡山に登りて、其の大學寮に宿す。時に夜氣漸く寒うして、夢まごかなること能はず。拂曉起つて窓を開けば、夜來の密雲いつしか全く晴れて、殘月淡く天空に在り、東谿の老杉、皆月を浴びて、光水の如し。秋風の蕭颯たるを聞きつゝ、坐して天の明くるを待つ。月益々淡く、東漸く白し。  
 昨日、杉と杉との間、雲霧深く罩めたるもの、今朝明け來れば、彼方に村落を現じ、此方に田圃を生じ、忽ちにして森出で、忽ちにして丘來り、近くは堅田の里、遠くは三上の山、刻一刻其の藏むる所を顯し來る。やがて旭光輝々ある限りの山河、大地、盡く其の姿を現じ、了れば、こゝに其の村や、川や、森や、丘を左に

爽快  
 晴々と氣持がよい。  
 指顧の間  
 指さし示したる又ふりむいたりして見る程の近い所。

巖々  
 山のけはしい形容。  
 限々  
 すみまゝ。  
 指點  
 それと定めて指さし示すこと。

し、右にし、前にし、後にして、一大湖水の其の中に出現し来るを観る。壯觀いふべからず。

朝餐を終へて大學寮を出づ。湖光爽快、沖島、多景島、竹生島を數ふべく、堅田、唐崎は指顧の間に在り。漸く行いて道を雲母阪に取り、比叡の絶頂四明が嶽に登る。雲母阪より登るに一巨木を見ず、更に進めば、矮小なる灌木も無く、到る所唯小篠の生ひ繁れるを見るのみ。巖々たる峻阪を攀ちて、遂に最高峯に達す。此の邊より京都を下瞰するに、市街の限々まで指點することを得。眸を北に轉すれば、小比叡を隔て、遙か



超然  
 他よりぬけ出て居るさま。

(一)京都や攝津の平野。  
 一時に集むひと目で見えみ。眸はひと轉手  
 琵琶の首の糸を巻く細い所。  
 (二)山城愛宕郡の山間に發し、京都市の東部を貫流して桂川に會す。  
 (三)大堰川の下流。大堰川は保津川の嵐山附近に於ける名稱で、保津川は丹波桑田川に發する。洛中  
 洛都の中。  
 蜿蜒  
 うねく。  
 重疊  
 かさなりあふ。  
 峽  
 山と山の間。  
 陵夷  
 次第に低くな

に大原の里、山谷の間に潜めるを見る。

凡そ四明の勝は、近江、山城二州に跨り、超然として群山を抜き、東の方琵琶の大湖と、西の方京攝の平野とを一眸に集め得べき所に在り。水を見れば、琵琶湖の胴腹は堅田、唐崎に至り、狭まりて轉手となり、更に瀨田、石山の邊より瀨田川となりて、一たび連山の間に隠れ、潜み流るゝこと幾里にして、更に遙かなる後方の山麓より宇治川となりて流れ行く。而して賀茂桂の二川は、東西より洛中を抱きて流れ、末遂に宇治川に合して淀川となり、白蛇の蜿蜒として走るが如く、平野の間を縫ひて、遙かに攝津に下り行く。山を見れば湖邊の峻峰比良山より竹生島、多景島、沖島に下り、遠くは伊吹山、近くは三上山となり、瀨田川の南岸に沿ひて、連山重疊、山城に入り、又小比叡より大原の里を経て鞍馬、高尾となり、高きは愛宕の山、低きは嵯峨の峽、其の末漸く陵夷して、西山一帯は河攝二州の方に消行く。而して湖畔に於ては堅田、阪本、唐崎、大津など手に取る如く、瀨田の長橋に汽車の煙を揚げて走るを見、山西に於ては白川、吉田、上京、下京、鳥羽、伏見、巨椋池など、淡靄中に旭光にきらめき渡るを見



る。山を繞りて宛然たる一大バノラマなり。恍として自ら覺えず起つて長嘯すれば、聲は脚底の白雲を越えて、遠く江城河攝の野に傳はる。

—(二)へちまのかは—

ること。陸はをか、夷はたひら。  
Panorama.  
恍として見とれてぼんやりする。  
長嘯ながくうそぶくこと。  
江城、攝津、河内、攝津。  
(二)杉村廣太郎著。大正五年東京至誠堂發行。

三訂帝國讀本卷三終

通用字及び正字對照表

(茲に其の主なるもののみを擧ぐ。本書には主として通用字を用ひたり。)

劍剪乃函減涼準况決冒兔免佞仍兩	通用正
劍剪刀函減涼準况決冒兔免佞仍兩	通用正
冤墻塚場噴噐唇叙収厩厨卿鄉即効	通用正
冤墻塚場噴噐唇叙収厩厨卿鄉即効	通用正
拔拿戲懺憇慨恒往稟屏并帽尅寶寇	通用正
拔拿戲懺憇慨恆往廩屏并帽尅寶寇	通用正
濱温氷藏欸概桿晉昂既整攆攆攆擯插	通用正
濱温氷藏欸概杆晉昂既整攆攆攆擯插	通用正
盃鼓痴畧留畫瑣玄猫猪猿熔陰潜潤	通用正
盃鼓癡略畧畧瑣玄貓猪猿熔陰潜潤	通用正
續續紀穀粘籤纂節笄竊秘願穎稟研	通用正
續續紀穀粘籤纂節笄竊秘願穎稟研	通用正
厠勅冲劬俟京亡並万	通用正
厠敕冲倣埃京亾並萬	通用正
婚姊妍妊野坂囁叶厮	通用正
婚姊妍妊埜阪齧協厮	通用正
考慙富忘庵嶋峯峩岳	通用正
攷慙富忘菴島峰峨嶽	通用正
概槁楫棕基案柿村普	通用正
槩槁楫樁基案柿村普	通用正
砧睹狸貉無烟汗毘朴	通用正
砧覩狸貉无煙汚毗樸	通用正
縲總網紆糾綜筍競稿	通用正
縲總網紆糾糲笋競稟	通用正

附錄

羈 船 羈  
 船 船  
 櫓 船  
 花 華  
 荒 荒  
 虱 譁  
 跼 蹠  
 鏤 銖  
 鏽 鏽  
 駢 雞  
 驅 鷄

本來ハ異字ナレドモ同字若シクハ略字トシテ往々混用セラル、モノ。其ノ中  
 \*標ヲ附シタル文字ニ限リ、慣用ニ從  
 ヒテ強ヒテ區別スルニ及バズ。

\* 巨 瓦  
 \* 體 体  
 \* 但 但  
 \* 僭 僭  
 \* 胃 胃

桓ニ同ジ。  
 笨ニ同ジ。アラシ、龜、粗。  
 カラダ。  
 タマシ、タマ。「但馬」  
 シタナシ、拙劣。  
 ミダリガハシ、猥。  
 身分ヲ越エテオゴル。「僭越」  
 カプト、兜。「甲冑」  
 ヨツギ、嫡子。又子孫。「冑裔」

\* 協 協  
 \* 刺 刺  
 \* 臺 台  
 \* 后 後  
 \* 商 商  
 \* 壺 壺  
 \* 姫 姫

カナフ、叶。  
 オビヤカス、脅。  
 サス。「刺殺。刺客。名刺」  
 モトル、ソムク、乖戾。「亞刺比亞」  
 星ノ名。又敬意ヲ表スル爲ニ語ノ上ニ添フ。台覽。台臨」  
 ウテナ、ダイ。  
 ノチ、アト、ウシロ、シリヘ、オクル。  
 キミ。「皇后」  
 アキナヒ。  
 モト、本。  
 ツボ。  
 ミチ、宮中ノミチ。  
 ツ、シム。  
 ヒメ。

\* 託 托  
 \* 擔 担  
 \* 改 改  
 \* 鎗 槍  
 \* 欠 欠  
 \* 糸 糸  
 \* 羨 羨

拓ニ同ジ。オス、ヒラク。  
 ヨル、タノム、ユダヌ、カコツク。  
 ハラフ。又アゲ。  
 ニナフ、カツク。  
 鬼ヲ追フトイフ屋ノ神。  
 アフタム。  
 ヤリ。  
 鐙ニ同ジ。鐘ノ聲ノ形容。  
 アクビ。「欠伸」  
 カク。「缺席」  
 \*ソイト、細絲。  
 イト。  
 支那ノ地名。  
 ウラヤム。

\* 虫 虫  
 \* 詫 詫  
 \* 詔 詔  
 \* 證 證  
 \* 豊 豊  
 \* 迄 迄  
 \* 撰 撰

魚介類ノ總稱。又マムシ。  
 ムシ。  
 ワビ、ワブ。「詫状」  
 訖ニ同ジ。アザムク。  
 ヘツラフ。  
 ウタガフ、疑。  
 アカシ、シルシ。「證明」  
 イサム、諫。  
 禮ノ古字。  
 エタカ。  
 マア。  
 エク、行。  
 エラア。(ヨリトル)  
 エラア。(書物ヲ編纂ス)

卻<sup>キヤク</sup> ヨマ、隨。  
 シリゾク。「退卻」  
 鍛<sup>カシ</sup> キタフ。「鍛鍊」  
 シコロ、「鍛」  
 宛字 (左の如き字は假名を  
 使用するをよしとす)  
 おぼつかなし 覺束なし  
 かひ (詮の意  
 の場合) 甲斐  
 きつと 屹度  
 さすが 流石、道  
 しまふ 仕舞ふ  
 せつかく 折角  
 だけ 丈  
 だめ 駄目  
 ちやうど 丁度  
 ちよつと 一寸、鳥渡

出鱈目  
 到頭  
 兎角、左右  
 迎  
 兎に角  
 中々、却々  
 振舞  
 果敢なし  
 本當  
 無駄  
 六ヶし  
 矢鱈  
 矢張  
 でたらめ  
 とうく  
 とかく  
 とて、とても  
 とにかく  
 なかく  
 ふるまひ  
 はかなし  
 ほんたう  
 むだ  
 むづかし  
 やたら  
 やはり

附 録 終

大正十一年一月十四日  
 大正十一年二月十三日  
 大正十一年三月十四日  
 大正十一年四月十五日  
 大正十一年五月十八日  
 大正十一年六月二十日  
 大正十一年七月二十二日  
 大正十一年八月二十五日  
 大正十一年九月二十八日  
 大正十一年十月三十日  
 大正十一年十一月三十一日  
 大正十一年十二月三十一日  
 訂正再版發行  
 訂正再版發行  
 訂正再版發行  
 訂正再版發行  
 訂正再版發行  
 訂正再版發行  
 訂正再版發行  
 訂正再版發行  
 訂正再版發行  
 訂正再版發行  
 訂正再版發行

價	定	三訂帝國讀本
卷九、十、各金三十六錢	卷二、三、四、各金四十五錢	大正十一年臨時定價
卷七、八、各金三十七錢	卷五、六、各金四十五錢	大正十一年臨時定價
卷九、十、各金六十一錢	卷二、三、四、各金七十七錢	大正十一年臨時定價
卷七、八、各金六十三錢	卷五、六、各金七十八錢	大正十一年臨時定價



發 行 所

東京市神田區  
通神保町九番地

合資  
會社

富 山 房

長電話神田三〇一四・三七六〇番  
振替口座東京五〇一番

著 者 芳 賀 矢 一  
 發 行 者 兼 會 社 東 京 市 神 田 區 通 神 保 町 九 番 地  
 代 表 者 坂 本 嘉 治 馬  
 合 資 會 社 富 山 房 社 長  
 印 刷 者 會 社 東 京 市 京 橋 區 木 挽 町 二 丁 目 十 三 番 地  
 合 資 會 社 電 新 堂

第二卷

七  
級  
保田之郎